ハーフハート魔法ハイブリッドくノ一：泥の起源

第2巻

著者
セレーネドリフト

日本に住み、景色を楽しみ、それを大切にする人を信じている人たちのために。

コンテンツ

第1章
第2章
第3章
第4章
第5章
第6章
第7章
第8章
第9章
第10章
第11章
第12章

物語の登場人物

物語の主人公、シラハラ。シラはハイブリッドウミガメのリーダーであり、その力で水を操ることができます。妖怪界での最後の冒険を経て、シラと仲間たちはさらに強くなりました。

レイカ - シーラの妹で、グループの中でも短気な性格。レイカは火を操り、重いものを持ち上げることができることで知られている。彼女は口がきけず、ボディランゲージとジェスチャーしか使わない。

智香は、グループの中では知的な天才で、真ん中の妹です。優しく穏やかな智香は、超能力を使いこなし、様々な発明品を生み出します。

マナコは末っ子で、グループの中では一番元気な女の子。可愛くて愛嬌のあるマナコは、動物と話したり、植物を育てたりするのが大好きです。

イキオイ -少女の養母蛇。イキオイは少女の子供たちを見つけてから14年間、育ててきた。

リン・ミュウ - 姉妹を助けてくれた妖精の守護者。魔法戦士を探すために地球に派遣された。妖怪界が安全になった今、彼女はウミガメたちと一緒にいることを許された。

メッちゃん - ウィキアから逃亡したロボット。現在はウミガメたちと暮らしている。妖怪の世界を救った後、ウミガメたちと暮らし、家族の一員となった。

キーノ - P.E.R.I ロボティクスという会社で研究をしていた人間の 10 代の少年。

ペリウィンクル・ヤマグチ博士 - ウィング一族に捕らえられたウミガメたちの仲間。C.L.I.との恨みからハイブリアを遠ざけていたことで知られている。

キャンディは、アイスクリーム、クッキー、キャンディケインなど、様々なお菓子を組み合わせたハイブリッドです。パートナー以外にも、お腹から口を開けて敵を捕食することができます。

サファイア -背中から破片が飛び出し、水晶の瞳を持つ水晶。彼女は人々に水晶を投げつけ、棘のついた爪で突き刺す。

ウィングクロー - ウィングー族の勇猛果敢なサムライ戦士。彼女の役割は、ハイブリッド軍団を編成し、彼らが非常に強力であることを知ったウミガメの魂を手に入れることである。

第1章

長い冷たい空気の中を、私と兄弟姉妹は、生命と人間と動物に満ちた、私たちの本当の故郷、地球へと戻ることができました。魔法のくノ一に変身し、妖怪の世界で戦い抜いた時、私の人生はスリリングな始まりでした。姉妹たちを救い、軍隊を組織し、人類を滅ぼして世界を征服しようとするシャドウサイドの邪悪な

計画を阻止するために、私は危険を冒しながらも、疲れ果てた戦いを繰り広げました。なんとか全員を救出し、今、私たちは故郷へと帰ってきました。妖怪の世界を旅する中で、私たちの助けを必要とする多くの新しい友達に出会いました。

僕たちはすっかり疲れ果てていた。まあ、僕にとっては。腹甲にはほとんど引っかき傷も傷もなく、皮膚は痣だらけだった。メッチャンは、逃亡者になるつもりだったので、一緒に来ようと申し出てくれた。打つだから、彼女をここに残すことにした。母は、私たちの功績を心から誇りに思ってくれた。もうC.L.Iに悩まされることも、血を求めて捕らえようとする衛兵に捕らわれることも、そして何よりも、ヨルヒ・シャドウサイドの影も消えた。ついに、彼らを完全に食い止めることができたのだ。

ほんの数年前、私たちは施設で実験を行っていましたが、カナコ・クオロという女性がシャドウサイドの邪悪な計画の真実を知りました。彼女は人類を滅ぼし、彼女の命令に従う怪物のようなミュータント、兵士たちで世界を置き換えようとしていたのです。

彼女は私たちの血を実験台にし、洗脳して兵士に仕立て上げようとしていました。しかし、カナコはそれを拒み、恐ろしい魔女との格闘の末、実験室に火を放ちました。彼女は計画を阻止するために自らを犠牲にして私たちを救い出し、イキオイに発見されました。

廃墟となった飛行機の森に何年も隠れていた私たちは、川岸に墜落した隕石を発見する。妖怪の女神が遣わした異世界の妖精、リンク・ミュウは、差し迫った災厄が迫っていることを告げ、敵や他の悪党と戦うための魔法戦士に変身するためのブローチをくれた。

我々は成功を収めた。幾多の世界を旅し、幾多の怪物と対峙し、シャドウサイドに終止符を打ち、黒鹿奈子の仇討ちを果たし、妖怪界を救った。しかし、姉たちは最後の血を吸い尽くされ、亡くなってしまった。私は彼女たちを想い、涙を流

し続けた。そしてついに、彼女たちは蘇った。皆、再び一つになり、今は安らかに眠っている。

「私は皆さん一人一人をとても誇りに思っています」と彼女は言いました。

そんなに多くはなかったけど、私たちが経験した冒険や、その途中で出会った新しい友達のことを伝えることはできた。妖怪が住んでいた妖怪の世界で、オキマスに捕らえられ、サーカスの戦士として奴隷にされそうになった。シャドウサイドを止めてからは、一度も食べずに済んだ。母は採ってきたベリーや魚介類を何でも分けてくれた。妹の笑い声が、私に希望を与えてくれた。こうしてまた一緒にいられるのだから、私たちはまだチームとしていられる。

「あなたが無傷でいなくて本当によかったわ」と彼女は微笑んだ。

「シーラのおかげです」マナコは私を見ながら言った。「彼女が私たちを蘇生させ、シャドウサイドを倒してくれたんです」

「それはそうかもしれない」と私は呟いた。シャドウサイドに負った傷を隠すため、全身に包帯を巻いていた。「でも、みんな一緒にいられてよかった」

「そうだよ、シラ」リンは元気よく言った。「あなたがいなかったら、私たちは危険な目に遭っていたかもしれないわ」

「ありがとう、リン」私は幸せそうに微笑んだ。「本当にたくさんのことをしてくれてありがとう。本当に長い旅だったわ」

なんだかすごく誇らしい気持ちになった。この森を、人によっては三重と呼ぶかもしれないけれど、兄弟たちよりも幸せになれたかもしれない。きっと大丈夫。

寒い夜、私たちはみんな巣穴で眠っていました。メッちゃんは休んでいて、リンは巣穴にいて、お母さんは巣穴の中で丸くなっていました。木陰の上に輝く月、黄色い光を放つホタル、茂みに響く小さな生き物たちの音、空にきらめく星々。すべてがとても穏やかだと確信しています。

何かの匂いがするまでは、夜明けが来ると確信していた。もしかしたら、お母さんが朝食を作っているのかもしれない。ご飯か、魚のシチューか？いや、違う。空気がすごく変な感じで、何かが燃えているようだった。肺がひどく痛み、呼吸が苦しそうだった。煙の匂いがした。

起き上がって片目をゆっくりと開けると、真夜中に何が起きたのか全く分からなかった。その時、奇妙な黒い雲が立ち上っているのに気づき、何か焦げた匂いがした. えっ…あれ？匂いの方向を見た。

飛行機の窓の端から覗くと、機体の下の方から怒号や叫び声が聞こえてきた。私は恐怖に息を呑んだ。一団の人間がたいまつを手に森を燃やしているのが見えたのだ。突然、それが何なのかが分かった。私は恐怖に駆られ、叫び声を上げた。

「火事だ！森が火事だ！」と私は叫んだ。私が恐怖に駆られて書斎から飛び出すと、家族は恐怖で目を覚ました。彼らは私が何を叫んでいるのか分からず、困惑した様子で心配そうに私の方を振り返った。「今すぐ逃げないと！」

「どうしたの？」リンは困惑して尋ねた。彼女は慌てて神殿から飛び出し、どんどん大きくなっていく煙の臭いを嗅いだ。飛行機の中に立ち上るひどい臭いを吸い込まないように、口を覆った。妖精であるリンのような小さな動物は、このひどい煙で窒息してしまうかもしれない。それを吸い込むと、彼女は体が弱っていくのを感じた。

「森から逃げないと。家が燃えている！」私は叫びました。

「その通りよ」イキオイは驚いてヒスヒス言い、尻尾を素早くハサミのように振った。そして私たちの方を向いて、「みんな、浅瀬へ！」と叫んだ。

起き上がると、姉たち全員が立ち上がり、飛行機の荷物を下ろし、階段を下り始めた。荷物がきしむ大きな音が、今にも落ちそうなことを告げていた。私はベッドサイドに置いてあったバッグを素早く掴み、なくさないように肩にかけた。飛行機は大きく揺れ、重みで地面に崩れ落ちそうだった。

煙があちこちから立ち上り、機内を満たした。煙のせいで呼吸が困難になり、私も息苦しくなった。黒い空気を吸い込まないように口を覆った。火は木々にまで達し、燃え始めた。木々は炎に包まれ、私たちの隠れ家になる場所まで燃え移っていった。

「お姉ちゃん！」マナコは泣き叫び、咳き込んだ。地面に落ちていたお気に入りの人形を掴んでいたのだ。小さなウサギの人形で、ボタンの目が付いていて、縫い目だらけだった。「もう無理！煙が濃くて、暑い！」息を止めて、妹のところへ駆け戻った。妹は膝をついて激しく咳き込んでいるようだった。妹は人形を握りしめ、気を失わないように必死だった。妹を抱き上げ、背中に乗せて、飛行機の外へ急いで出た。ちょうどその時、火が鋼鉄にまで達していた。蔓が折れ始め、私たちは枝に飛び移った。

息を切らしながら、灰を避けながら枝を滑り降り、無事に地面に着地した。衝撃で骨が痛むほどの痛みに、私は息を切らした。体を起こし、皆を安全な浜辺へと導き始めた。そうすれば火は海岸まで燃え移らないだろう。

火は猛烈な勢いで森中に広がり始め、木々を焼き尽くし、地上の動物も空中の動物も、山火事から逃れようと必死でした。木の枝が目の前に落ちてきて、私たちはよろめきました。

「こっちだ！」イキオイが叫んだ。私たちは反対方向へ向きを変え、私はヒーローに変身した。私は水の力を使って、周囲に広がりつつある火を消し始めた。

他の姉妹たちは口を覆い、メッチャンは瓦礫に閉じ込められた数匹の動物を救出する必要がありました。彼女は伸縮自在の腕で懸命に動物たちを掘り出し、安全な場所まで運びました。燃え盛る死の森から立ち上る濃い煙をずっと見続けていましたが、足がもつれそうでした。

バキッ！燃え盛る枝が落ちてきて、レイカの足に直撃した。レイカは地面に倒れ込み、痛みに叫び声を上げげた。「レイ！待って！」私は叫んだ。急いで妹のところへ戻り、彼女を瓦礫の中から引きずり出した。レイカは苦痛に呻き、焼けた肉が足に刺さって熱を帯び始めた。私は彼女を肩に担ぎ、燃え盛る森から連れ出さなければならなかった。彼女は炎から逃れようと必死だった。

ようやく無事に浜辺に追いつき、浅瀬までたどり着いた。私たちは鼻水で全身が煙まみれになり、煙が夜空を覆い、炎の轟音が森を舞っていることにほとんど気づかなかった。

リンは恐怖に息を呑み、私が来た道を振り返ると、恐怖で目を見開いた。家は炎に包まれ、木々は燃え、飛行機はゆっくりと家の床下に墜落し始めた。森も、隠れ家も、持ち物も、全てを失った。

「そんなわけないわ」智香はショックと悲しみで口を覆い、息を切らして言った。

「私たちの家が」マナコは泣き言を言い、目から涙があふれた。「全部なくなってしまった」

「あの人間たちは、私たちがモンスターだと勘違いして襲ってきたのよ」リンはすすり泣いた。メッちゃんが友達の方を向くと、レイカは動揺して息を吐き、眉をひそめた。

「人間たちは、あまりにも急にそんなことが起こったんだ…どうして私たちを攻撃し、家を燃やしたんだ？」

「わからない」とイキオイは悲しそうに言った。「人間はみんな私たちを怖がっている. 森 には妖怪が住んでいて、そのうちの一人が私たちを見たという話を聞いたことがある。火事ですべてを失ってしまったのではないかと心配だ」人間は私たちにとってはあまりにも強力すぎるのです。」

「お母さん」と私は呼んだ。「麗花が怪我をしたの。火が足に当たったのよ」私が近くの岩の上に妹を降ろしている間、母は妹のところへ滑るように歩いた。母が妹の足を調べると、麗花は顔をしかめ、痛みに呻いた。火傷の跡は真っ赤で、まるで赤い跡のようだった。

「ただの火傷の跡です」と彼女は言った。「自然には消えないでしょう。冷やして包帯で文字を書いていくしかないでしょう」

うなずきながら、私はしばらくの間、森に燃え上がる炎を眺めていた。残った片目の前で、あらゆる命が燃え尽きていく。目を離すことはできなかったが、開いた片目と閉じた片目から涙が流れ落ちていく。私たちはすべてを失った。それだけでなく、家も森も失い、住む場所も、食料も、水も何もない。

真奈子はまだ悲しみに暮れ、うつむき、目に涙を浮かべている。近くでは、智香が麗華の足の火傷の跡を必死に拭っていた。ひどく痛むようで、麗華は足を蹴り飛ばすのをやめない。

「これからどうすればいいんだ？ 隠れる場所なんてどこにもない」とメッチャンは甲高い声で言った。「火事で全てを失った。家も隠れる森もない。それに、あの人間どもは俺たちを狙って実験するだろう」

「パンくず」マナコは泣きながら泣き叫んだ。「またこんなの！もう死にたくない！」

「あら、マナコ、泣かないで」トモカは妹の肩を軽く叩きながら、彼女を落ち着かせようとした。「大丈夫よ。きっと家が見つかるわ」

「どこか安全な場所に行こう」とイキオイは決意した。「あまり遠くない場所。木も水もない森ではない、西の方へ。」

"どこにいるの？"マナコは尋ねた。

「村のどこかよ」と彼女は提案した。「とても長い旅になるけど、人間たちは私たちを怪物だとは思わないから、危害を加えられることはないわ」私は不安になった。もし人間たちに見られたら、何をされるかわからない。私たちはゆっくりと燃え盛る森から離れ、浜辺へと歩いた。森は既に静まり返っていたが、やがて燃え盛る炎に包まれ始めた。

第2章

朝日が海に沈み始める頃、私たちは海岸の小道を歩き続けた。背後の森は消え去り、わずかに残ったものだけが残っていた。私たちが暮らしていた森は消え去り、残ったのは私のバッグ、智香の化学セット、真奈子のウサギの人形、レイカの古い槍、そして母の忍法帳といったわずかな持ち物だけだった。残ったのはこれだけで、ほとんどの持ち物は火事で失ってしまった。これらを置いて、私たちは前に進まなければならない。

一晩中、休むことなく歩き続け、人間に見つからないように岩の後ろに隠れる必要がありました。立ち止まることも、人間から身を隠すこともせず、ほぼ数週間も歩き続けました。

森から歩き出したせいですっかり疲れ果てているのに、それ以来何も食べていない。リンは、火事で焼け落ちて以来何も食べていないと文句を言っていた。もう10日間も何も食べていない。

彼女は飛行機でひどく疲れていたので、しばらく私の肩に寄りかかって休んでいました。友香は以前、食べられるものが何も食べられなくても、体は勝手に栄養を蓄えてしまうと言っていました。お腹が鳴るのを無視していたら、喉の渇きで体がどんどん疲れてきていました。数日後には、喉の渇きと飢えで死んでしまい、もうこれ以上先へ進めなくなってしまうでしょう。

私たちのうちの誰かがどうなるか考えました。姉妹たちは疲労と脱水症状で倒れてしまうでしょう。リーダーは必ず助けてくれるので、姉妹たちを置いていくわけにはいきません。

ようやく海岸に着いた頃、もうこれ以上は進めない。お腹が空いていて、筋肉は縮み上がり、黒い斑点だらけだった。トモカはこれを栄養失調と呼んでいる。つまり、十分な栄養を摂取できていないということだ。

麗華が地面に倒れる音が聞こえたような気がした。見てみると、麗華はすでに地面に倒れていた。まだ息はあったものの、すっかり疲れ切っていた。心配になり、駆け寄った。妹は息を切らしながら私を見上げ、大丈夫だと合図した。

「お母さん」と私は叫んだ。「麗華はもうこれ以上続けられない。まだ疲れているし、傷ついているのよ」

母は私たちをじっと見つめ、ゆっくりとため息をついた。「もうここまで来たんだから、先へ進むまでここに留まろう」と母は決めた。そして私たちはそう決め、かつての漁場へと足を踏み入れた。

釣り場には小さな檻のある小屋が一軒と、桟橋のすぐ近くに放置された古いカヌーが一軒あった。人がいなくてほっとした。森の近くにも小屋があったが、屋根瓦は剥がれ、木材は腐っていた。私はキャンプを設営し始め、薪を集めていた。その間、姉たちは火事になった以前の家で何が起こったのかを愚痴りながら話していた。

姉妹たちは長い旅の後で休息を取ることができましたが、人間によって焼かれ、奪われた故郷に起こった恐ろしい記憶を消すことができません。

「私たちの家がなくなってしまったなんて信じられない」マナコさんは岩の上に座り込み、すすり泣いた。

「前に進み続けないといけない」とトモカは言った。「過去を捨てて、新しい居場所を見つけないといけない」

「でも、どこ？」

「近くに街があるんじゃないかな」と私は推測した。妖怪界のことをずっと考えていた。妖怪界には街があるし、もし活気のある街が一つでもあれば、そこしか選択肢がないかもしれない。「もしかしたら、そこに住めるかもしれない」

「でも、この辺りは人間だらけなのよ」リンは甲高い声で言った。「でも…もしかしたら、私に何かできることがあるかもしれないわ。ブローチをちょうだい？」うなずき、私たちはリンにブローチを渡した。「溶け込めるように、アップグレードするわ。一日かかるわ」

リンが焚き火の方へ仕事に向かい始めたので、私は岸辺へ行き、食べ物を探すことにしました。長い間何も食べていないのです。トモカは、このまま食べなくても生きていけるかもしれないけれど、一ヶ月もすれば体が衰弱して餓死してしまうだろうと言いました。初めて、生き残るためには魚介類のように狩りをする必要があることを知りました。どこかの水の中に潜んでいるかもしれない獲物なら、食べられるかもしれないのです。

「マナコ！」と私は呼びかけた。「薪を集めて、鍋でも何か食べ物を探してくれないか？」

「私が行くわ」と真奈子は言い、森の中へ駆け出した。近くでは智香が麗華の足に包帯を巻き、火傷の跡を拭いている。少なくとも妹は大丈夫そうだ。

「なあ、レイ？」あなた大丈夫？麗香はうなずき、立ち上がって岸辺の道を歩き始めた。

小屋でバケツとナイフを見つけ、それを掴んで岸へ向かった。水に入ると、足元の水が波打った。足が魚の尾のように変形し始め、私は泳ぎ始めた。岩の上で漁網を持ったレイカが、その様子を見守っていた。

水中を嗅ぎ回っていると、小さな物体に気づきました。生き残るためには貝類を食べなければならないのですが、それだけではありません。ヒトデや海藻、ロブ

スター、海藻も食べなければなりません。砂地に泳ぎ着いたものを集めるために、もっと深く潜らなければなりませんでした。逃げ出したものもいれば、捕まったものもいました。一匹が爪で私の鼻をつまんで、ちょっと痛いです。

少なくとも今夜は何か美味しいものが食べられるだろう。

その間、妹たちは小屋の中を探検して、何か役に立つものを探していました。智香は古い本を数冊と古い日記帳を見つけました。

「ねえ、見て」マナコは小さな檻を見ながら叫んだ。巣の中には、ふわふわの耳の長い生き物が2匹いた。「どうしてこんなかわいそうな哺乳類をそこに置き去りにできるの？」

「誰かが餌をあげるのを忘れたのかも」とトモカは推測した。どうすればいいか分かっていたマナコは、手を下ろして小さな長い耳が食べられるように野菜をいくつか育てた。ニンジンを一本取り出し、ツルでケージの鍵を開けた。そして、それをケージの中に入れた。「ほら、どうぞ」とマナコは優しく言った。「飼い主がいなくなってから、ずっと何も食べていなかったのね」

「ところで、マナコ、この古い日記を見つけたの」と彼女は言った。本を開くと、奇妙な海の生き物たちの絵が浮かび上がった。そこには、水泡の中に眠る人魚の生き物の絵があった。「ほら、書いてあるわ。『遠い昔、ハイブリアンと呼ばれる人間たちが、どこか別の世界で平和と調和の中で暮らしていた』」

「ハイブリアンとは何ですか？」

「動物の特徴を持つ半人半獣。黄金の血球を持って生まれた彼らは、我々全員よりも強力だ。もしかしたら、C.L.Iが最初から彼らを追跡していたからかもしれない。このことを他の者たちに伝えるべきだろう。」

魚介類を全部集め終えると、小屋から近くにあった包丁を取り出し、貝殻と身を切り分け始めた。貝殻を開けると、何か丸いものを感じた。つついてみてみると、カラフルな真珠が飛び出してきた。その小さな物体に、私はすっかり驚き、感嘆した。とても綺麗だ。さらにティッシュを剥がしていくと、さらにカラフルな真珠が現れた。私はもう大喜びだった。姉たちはそこまで気を取られていなかったが、日が沈みかけていたため、焚き火を焚かなければならなかった。レイカが火を起こすのを手伝ってくれ、私は魚介類を調理し始めた。

トモカは全てを説明し始めた。「それで私とマナコがこの日記を見つけて、これを手に入れたの。ハイブリアンの起源が書いてあるの。C.L.Iは長年、私たちが人類よりも強力だったから探していたの。ハイブリッドな部分を持つウミガメみたいな見た目だって書いてあるの。」

「本当に驚いたよ」とメッチャンは言った。「君たちが見つけたあの日記は、君たちの出自とこのハイブリアがどこから来たのかを知るための完璧な証拠になるだろう」

自分たちの起源について幸運が見つかり始めていると確信していましたが、自分たちで捕まえた食べ物があり、旅を続けるのに十分な食料がありました。

その後、私たちは朝まで歩き続けなければならないと悟った。その間、私は妖怪探検に出発する際にアーニャにもらったオーブを使い始めていた。オーブを持つ時は名前を唱えるようにとアーニャは教えてくれた。そうすると、アーニャの姿が浮かび上がってきた。

「やあ、シラ」アーニャが元気よく言った。「久しぶりですね。この旅はどうだった？」

「大したことじゃないよ」私は肩をすくめた。「でも、家は失くしたんだから」

「どうしたの？」と彼女は尋ねた。私は、人間が木を見つけて燃やし、全てを失ったこと、そしてこれから住む場所を探すことを話し始めた。「まあ、それはひどいわね。それで、あなたたちはどこに住むの？」

「西のどこかよ」と私は呟いた。「長い旅になるから、もう二度と会えないかもしれないわ」

「わかってるわ。でもいつかあなたの世界へ行くわ」アーニャは声を張り上げて言った。最後の別れの言葉だった。ようやく電話が切れた。家族の将来が心配になってきた。家を失い、新しい住まいを探さなければならない。人間の世界で生きていく唯一の方法は、生き延びること。

翌朝、目が覚めると太陽が昇っていました。長いため息をつき、立ち上がり、目をこすりながらうめき声をあげ、振り返ると姉妹たちが目を覚ましていました。

「おはよう」とリンが挨拶した。「寝坊したね。さあ、急ぎましょう。旅を続けなくちゃいけないんだから」

「そうだ」私はあくびをして、青い髪を整えた。そして立ち上がり、母に近づき始めた。

「あなたたち、これからブローチをつけるのよ。リンが特別な機能を追加してくれたの。本物の人間に変身できるのよ」と母が言った。「ブローチを一度こするだけで変身できるのよ」

彼女はブローチを私たちの手に渡した。下を向いて、人間に溶け込まないといけないのかと不安だったが、試してみるしかない。ブローチを胸に当ててこすった。目を閉じ、変化が私を包み込むのを感じた。目を開けると、自分が人間であることがわかった。髪は金色で、顔色は普通の青色だった。目。

見てみると、姉妹たちも人間だった。レイカとトモカは二人とも茶色い目をしていて、髪もまだ無傷だった。

マナコの目は緑色で、髪もまだそのままです。

「ねえ、私、変な顔してる！」マナコはニヤリと笑った。「すごく変な顔してるわ。」

「私たちはそうやって溶け込むのでしょうか？」と私は尋ねました。

「もちろんよ」と母は言った。ブローチを押すと、長い黒髪に着物を羽織った美しい若い女性に変身した。まるで芸者のように美しく見える。

リンは、自分が小さなおもちゃであるふりをするために、私のジャケットのポケットに隠れることにしました。

「どうしてブローチをもらえなかったの？」とマナコは尋ねた。

「私は妖精なので、人間の姿に変身することができません」と彼女は私たちに言いました。

「わかってるわ」と母は言った。「でも、ここに隠れていれば安全よ。しばらくはこの環境に溶け込まないといけないのよ」

「ジャケットのポケットに隠れたらどう？」と私は尋ねた。「おもちゃのふりをすればいいんだよ。」

「おもちゃ？」リンは尋ねた。「私がおもちゃじゃないって知ってるよね？」

「でも、あなたは完璧に溶け込めるわよ」と母は言いました。

それから彼女は私たちに、そのまま歩き続けるように合図した。私たちは歩き続けたが、それは果てしなく長く続いた。森の中を歩き続けるなんて、もう絶対に無理だろうと思った。3ヶ月も続いたのに、もうすぐそこだ。

私の 目驚きとともに視界が開け、光と高いブロック状の物体が溢れ出る何かが見えました。大きなモンスターが角笛のように鳴り響く音が聞こえ、家族と私は新しい世界を発見したことを悟りました。

街は……

第3章

初めて街に出た。何年も離れていた森とは違っていた。外の世界は広大で、建物とたくさんの人で溢れていた。木も草も動物も何もない。本当に様々な人がいた。しかも、日本語の看板もあった。東京、新宿、港、上野。私たちが目撃し、学んだたくさんの日本語。

巨大な街に入るのが本当に怖かった。心臓がドキドキと激しく鼓動していたし、妹たちもそうだった。真奈子は智香にしがみついていて、震えが止まらなかった。麗香は

大きな引っ越しの音に驚いて飛び上がってしまった。また彼女は騒音を遮断しようと、私のジャケットのポケットに身を包んだ。車のクラクション、自転車の音、そして足音。本当に賑やかな街だ。

「人間がいっぱいいるのよ」マナコは、私たちの周りにこんなにたくさんの人間がいるのが怖くて、すすり泣きました。「迷子になったらどうしよう？」

「大丈夫よ」と母は言った。「落ち着いて。奇妙な建物とたくさんの人間のせいで、私たちは一度も街に行ったことがないの。でも、これだけはわかっている…人間は私たちを怖がっているけれど、神社の前では私たちを崇拝しているのよ」

「東京にも神社があるってこと？」と智香は尋ねた。

「ええ、あるわよ」と母が言った。「日本中にたくさんあるわ。まずは静かで寝られるくらい広い場所を探しましょう」

街中を歩き回り、私たち全員が住めるような廃墟を探しました。ほとんどの建物は小さな家が一つにまとまっているような感じでしたが、きっと私たちも遅かれ早かれ家を建てる羽目になるだろうと思いました。人目につかない場所で、たくさんの人がカフェに行ったり、公園で遊んだり、仕事に行ったり、写真を撮ったりと、色々なことをしているのが見えました。子供の一人が私たちを見て、「ママ、見て！カメだよ」と言いました。

そして母親の一人が「あれはただウミガメの着ぐるみを着ている人よ」と言いました。

出会った日本人学生の中には、私たちの写真を撮ってくれる人もいました。リンは人間には見えないので、本当に安心しました。私たちが人間の姿で隠れたり、脱いだりすると、私たちをマスコットキャラクターとして見て、興味津々な人が現れることもあります。

不思議でしたか？仮装している人はたいてい、私たちが仮装しているように見えると思うんです。マスコットと呼ばれるキャラクターは、日本の文化に溶け込んでいていいですね。

港区と東京という二つの場所に近い、巨大なお寺の近くに着いた時には、辺りはすっかり暗くなっていました。家を探し回ったのですが、全く見つかりませんでした。もしかしたら、二度と見つからないかもしれないと不安でした。

「私たちは仮定する「もうどうしたらいいのかしら」と智香はため息をついた。「あちこち探したけど、住める空き家が見つからなかったの」

突然、何かが目に飛び込んできました。公園の近くに、古い桜の木々に囲まれた何かがある。川に架かる橋のある、お寺のような建物のようでした。古くて伝統的な、そして独特な構造の建物でした。ふと、このお寺こそ私たちが住むべき場所だという予感がしました。もし私の直感が、ここが廃墟だと告げるなら、ここを家にすべきだと思いました。私は母の方を向いて、「ここのお寺を使うべきでしょうか？」と尋ねました。「ここはぴったりの場所だと思うわ」と答えました。

母は家に近づき、寺を眺めた。何も言わず、私の提案を受け入れてくれるだろうかと心配していた。母はゆっくりとドアを開け、私たちは中を覗き込んだ。中は完全に空っぽだった。家具はなく、すべてが埃とクモの巣で覆われていた。足元の床は汚れていて、木材はどれも古びて古びていた。

「この家は廃墟みたいで、誰もいない。家具もないし、何もかも埃まみれで、クモの巣だらけだ。娘たち、住む場所を見つけたみたいだ。」

マナコは興奮して言った。「わあ！素敵！」彼女は家の中に駆け込み、辺りを見回した。腐った食べ物を踏みしめながら、足がザクザクと音を立て、埃を吐き出しそうになった。「ここが私たちのキッチンよ！」彼女は反対側へ駆け出した。「それに、2階もあるのよ。」

「本当に素敵ですね」とメッチャンは周りの景色を見ながら言った。「このお寺に住むのも、きっと慣れるでしょう」

「今はここでいいわ」と母は言った。「都会の生活に慣れなきゃいけないの。森みたいには見えないかもしれないけど、日本は私の故郷よ」

夜が更けていく中、私は二階へ向かおうとした。すると、姉妹たちが伝統的な床を見下ろしていた。四人が寝るには十分な広さで、窓からは日本の景色をほぼ一望できた。ベッドがなかったので、床で寝るしかなかった。私は床のような硬いものの上で寝るのが苦手だった。肌の下が硬くて冷たかったからだ。真奈子は座り込み、横になった。「すごく硬い！」と彼女はうめいた。いつも寝ていた柔らかくて穏やかな隠れ家とは違っていた。「だって、床を見て。石みたいに硬いのよ」

「この家での生活に慣れなきゃ」と智香は母を落ち着かせようと言った。「明日の朝、この家を片付けるの。母は、母に合う仕事を探さなきゃって言ってたわ」

私も智香に同意する。「うん」とため息をついた。「もうすぐちゃんとしたベッドが手に入るし、この街での新しい生活にも慣れるわ。森でたくさんの思い出が作れると思う」目をこすりながら、あくびをしながら地面に横になり、床で眠った。とても寒くて震えていたが、苔の寝具がないのは以前と変わらない。でも、明日からまた新しい生活が始まる。

「ねえ、白原、起きて」リンの声が沈黙を破った。床の冷たさに、私は長いあくびをした。頭上から差し込む陽光が、私をじっと動かした。もう朝？ 辺りを見回すと、姉た

ちもあくびをしながら目を覚ましていた。「今日も一日が始まるから、家の掃除をしよう」

「メッチャンはどこ？」私はあくびをしながら尋ねた

「ああ、夢を見ているのよ」と彼女は説明した。クローゼットの中のメッチャンを指差した。台の上に立っていて、頭を下げていた。黒いバイザーをつけているにもかかわらず、眠っている。「私たちが危険にさらされたときに目覚めた場合に備えて、寝て突進するのよ。家はまだ空っぽだから、片付けが終わったら家具を持ってこなくちゃ」

眠気を覚ました私は立ち上がり、クローゼットに仕事に必要な物資を探しに行きました。ありがたいことに、そこにはティッシュペーパーとビニール袋がいくつかありました。

手を伸ばして、壁や隅に張ったクモの巣をいくつか剥がした。手にベタベタとくっついていたが、とりあえずバッグにしまった。仕事を探している母の様子を見に行った。

「シラ、起きろよ」

「ああ」私はあくびをして、眠気を振り払おうとした。「さて、もう目が覚めたし、これから何をすればいいんだろう？」

「生活していくためには家を維持しなければなりません。自分に合った仕事を見つけられるでしょう」と彼女は言った。「もっと普通の仕事でお金を稼げる仕事が見つかるでしょう」

私は小さく頷いた。東京は大都市とはいえ、やるべき仕事は山ほどある。私は踵を返し、蜘蛛の巣を掃除しながら、突き破られそうな古い床板を避けながら歩き続けた。辺りを見回し、すべてが細部まで行き届いていることに驚きを隠せない。まるで

自分が森の中で一人で暮らしていることを忘れてしまいそうだった。辺りを見回すと、周囲の環境が身近に感じられる。

こんなところに一人で暮らすなんて、本当に不思議な気がした。まるで自分の家に暮らしているみたいだ。

麗華が浴室から出てきた時、私は突然びくっとした。ゴキブリが何匹か這い回っているのを見て驚いた。怖くはなかったが、彼らは走って足元を通り過ぎて窓から出て行った。幼い頃のことを思い出した。麗花はゴキブリをひどく怖がっていた。私には小さなネズミに見えたからだ。ゴキブリが現れるたびに麗花は飛び上がって、あちこちにゴキブリを見せようとした。今でもその恐怖は拭えない。

「ハッ！あなた「ゴキブリが怖くなったの？」真奈子は短気な妹をからかって笑いました。麗花は怒りに震えながら唸り声を上げ始めましたが、智花が彼女を庇いました。

「落ち着けよ」と彼女は言った。「ただのゴキブリよ。ええ、たくさんいるし」

「それに、もっと大きなゴキブリ捕獲器が必要だね」とため息をつきながら言った。害虫を捕獲できるゴキブリ捕獲器がないか探しに階下へ向かった。

家の中を長時間かけて掃除し、クモの巣を取り除き、土を出し、ゴキブリを全部追い払った後、私たちは外に出て、水中の枝や汚いヘドロを片付けなければなりませんでした。

水の色は変だ。まるで泥だらけで、まるで変な色をしているみたいだ。私の水の力で浄化して、明るく澄んだ水に戻さなければならない。この場所はとても広くて、川の真ん中に木があるのに驚いた。その木は古く、枝の先には長い桜の花が咲いていた。

マナコは小さな小石の庭に行き、花を植えるのに使いやすいものを探し始めた。土の中に茶色いものが隠れているのに気づき、ツルを使って泥を掘り起こして引き抜いた。

「ねえ、シラ」と彼女は私に声をかけた。「小さな祠を見つけたの」

「そう？」と私は尋ねた。そこへ行き、マナコに案内してもらった。確かに、それは神社だった。小さなお寺のような形をしていて、まるで江戸時代に誰かが建てたかのような古さだった。「どこで見つけたの？」

「庭の近くで見つけたのよ」と彼女は、見つけた庭の方を見ながら言った。「きっとリンのために、あの小さな家で寝られるものを探しているんでしょうね」

「素敵な色合いですね」と言いながら、私は妹の手から神社を受け取りました。「リンに神社をあげます。きっと気に入ってくれると思いますよ」

それを抱えて二階へ戻り、選んだ部屋へ向かった。リンに神社を見せるのが待ちきれない。どんな反応をするだろうか。神社が醜いと思うだろうか？

「ねえ、リン」と声をかけ、「気に入ってくれそうなものを持ってきたの」と妖精の友達に見せてあげた。祠を見ると、リンはひらひらと降りてきて、小さな建造物を見た。「醜いかな？」

「すごく素敵ね。まるで仮住まいみたい」とリンはニャーニャー鳴いた。「もっと飾り付けた方がいいかもね」リンが神社を気に入ってくれて、すごく嬉しかった。とりあえず、全部片付けたおかげで家は完成。夜、母が帰ってきて、すごく気持ちよさそうなマットレスを4枚も持ってきてくれた。

「苔の寝具とは見た目が違うかもしれませんが、柔らかいマットレスなので、地面で寝る気にはなれませんよ」と彼女は言った。

嬉しかった。私たちみんなも。あの頃の苔の巣穴のように、暖かく柔らかなベッドで眠れる。少なくとも今は新しい住まいがあり、これから新しい生活に慣れていく。ベッドに深く潜り込みながら、この街での生活はどんな感じだろうと考え始めた。森は静かで穏やかだけど、今いるこの場所は活気があって騒々しい。でも、ここは私たちだけの居心地の良い寺院で、幸せに暮らしている。

第4章

数日前から、私たちは寺院での新しい生活に慣れ始めていました。ほとんどの部屋はすでに掃除が行き届いており、床下にうっとうしい虫はいませんでした。天井にもクモの巣はなく、内外ともにすべてが清潔でした。私にとって、ここは森というよりは、むしろ穏やかで優しい場所でした。

母は庭師の仕事を見つけ、まなこはお寺の外で自分の庭を作り始めました。ともかは別の部屋に小さな実験室を作り、メッちゃんが夢モードに陥らないようにしながら、実験に集中していました。

リンはもう神社を気に入っていて、誰もいない神殿を見回している私に気づいた。「家具があれば、もっと家らしくなるのに」とリンは言った。私も友達に同感だった。バッグなど、壊れずに済んだほとんどのものを救出しておいてよかった。冒険中はバッグを持っていたし、他のみんなもそうだった。

食べ物がなかったので、海のどこか、神社（私たちのような精霊を喜ばせるために、人々は時々食べ物を捧げていました）、あるいは食料が備蓄されている場所など、どこかで食べ物を探す必要がありました。少なくとも、私たちはここでとても幸せです。

レイカと私とのトレーニングが終わると、他のメンバーもリラックスし始めました。家にこもってからもう1週間近く経ちましたが、そろそろ外に出て外の世界を探検したいという強い思いがありました。

「そろそろ外に出てもいい頃だと思うよ」私は母に尋ねました。

「いいえ」と彼女は答えた。「あなたたちがまだ未熟で力を使うことができないというのは、とても危険なことです。あなたたちはあまりにも幼すぎるのです」

かなりがっかりしました。妖怪界での冒険以来、一生懸命修行してきたのは分かっていたのですが、人間界にはいないんです。

「でも、ずっとここにいるわけにはいかないわ」と智香は抗議した。「あなたはこれまでずっと私たちを守ろうとしてくれたのに」

「あなたは、人間はみんな昔は悪かったと言っていましたね」とマナコは答えたが、レイカにも一理あると感じた。

「そして何よりも、私たちは永遠に家の中に隠れ続けることはできませんでした」と私は言い終えた。

母はじっと私たちを見つめていたが、私たちの懇願する表情はもっと切実だった。母はため息をついた。「わかったわ。あなたたち、今夜は行っていいのよ」

初めての街への旅に、私たちはホッとしながらもワクワクしていました。私たちの故郷とは違いますが、きっと怖がる人間がたくさんいるでしょう。まずはリンに

話しかけなければなりませんでした。二階へ上がると、小さな妖精が祠の中にいました。

「それで、街に行くの？」私がすべてを話した後、リンは尋ねました。

「ええ」と私は言った。「私たちはたくさん訓練してきたので、人間の世界の外へ行く準備はできていると思います。」

「簡単ではないかもしれない。ありがたいことに、君には人間に戻れるクローキングブローチがある。使い方を覚えているか？」

「もちろんです」私はうなずいた。

「よかった」妖精は羽を羽ばたかせながら微笑んだ。「そうすれば、完璧に溶け込めるわよ」

「行くぞ、シラ！」マナコが叫んだ。「時間だよ。」

ため息をついた。そろそろ外に出る時間だ。「リン、必ず戻ってくるわ」と彼女に言った。「約束するわ」

立ち上がって階下に降りると、母が私たちを一列に並べ、人間の世界の危険性について話してくれました。

「危険よ」と彼女は言った。「ブローチを使って昼間は人間になり、夜はミュータントになるのよ」

夜になると、私は先頭に立って、姉妹たちもそれに続きました。リン・ミュウは、これから何が起こるのかと心配しながら、私の隣を飛び回っていました。「言っておきますが、人間には私の姿は見えません」と彼女は言いました。

「分かってるわ」マナコは言った。「あなたは精霊よ。そして聖霊は人間の目には見えないのよ」

「人間が精霊の存在を信じるなら、そういうのもあるかもしれないわね」と智香は言った。私たちは覚悟を決め、人間界への扉を開けた。

最初は少し怖かったけれど、今や私たちの周りはまるで新しい世界だった。まるで故郷と違うかのように、私たちは辺りを見回し始めた。たくさんの建物、生きた人間、そして学校だろうと推測される巨大な建物があった。木々もいくつかあり、緑の芝生が地面に広がる公園もあった。公園には寺院も建ち、木々にはピンクの花が咲いていた。普通のティーンエイジャーとして受け入れられているのに、影に隠れなければならないとは、どんな感じだったか想像してみてほしい。

小さく見えるアパートがたくさんあり、公園もなかなか素敵で、通りには何千人もの人が溢れていました。静かな場所かと思っていましたが、実際はとても賑やかでした。

「ここは本当に活気に満ち溢れているね」と私は言った。麗華も同意した。この街が以前よりずっと騒がしいことを理解していたのだ。彼女は都会の暮らしに慣れるつもりで、落ち着いていようとしていた。

「すごいでしょ？」マナコは興奮して言った。「だって、見て。この建物にお菓子がいっぱいあるじゃない？」緑色の瞳は飢えに満たされ、尻尾は狂ったように振られていた。妹をこの世界に巻き込みたくないから、妹たちを誘い出して連れ出した。

路地に隠れていると、小さな箱がぎっしり詰まった荷物を抱えた引っ越し業者を見つけた。もしかしたら、一つ盗んでも悪くないかもしれない。少なくともカップ4杯分の箱を持って、安全な屋上へ行き、荷物の文字を確認した。そこには漫画

風の人魚姫の絵が描かれ、文字は記号で書かれていた。私たちは日本語をたくさん覚えたので、文字を読み始めた。

たまみはスパイシーラーメン。こんなの初めて聞いた。みんな変な食べ物食べるんだな、って思い出した。開けてもいいかな？ 罠じゃないことを祈りながら、ゆっくりと開けてみた。中にはオレンジ色の動かない虫が入っていた。動物っぽいものではなく、野菜がぎっしり詰まっていて、ほんの少し水が入っていた。カップからは湯気が立ち上っていて、まるで茹でて人に出す準備ができたかのようだった。

「食べ物だと思う」と智香は推測した。

「妖怪の食べ物とは違いますね」とリンは答えた。

「試してみます」と、いつものようによそよそしいまなこは言った。小さなカップを手に取り、それから箸を取り出した。ずっと持ち歩いていた箸だ。麺を掴み、口に入れた。私たちは彼女の反応を待った。数秒後、彼女は息を呑み、口から湯気を吹き出した。「わあ！本物の味！」と彼女は叫んだ。「すごく辛くて、舌がヒリヒリするわ」

彼女が何を言ったのか、私たちも誰も分からなかった。麺を食べ始めると、ニンジン、緑のもの、黄金色のスープの味が口の中に広がった。とても美味しかった。新しい、私たちのお気に入りの味を試したような気分だった。ただ、本当に辛い。覚えておいてほしいのは、それ以来人間の食べ物は食べていなかったのに、今は食べているということ。

私も同感です。街は本当に美しく、外にはまるで私たちの故郷のような野生のジャングルが広がっています。こんなに人が多くて木が少ない新しい家に住んでいるのは不思議な感じですが、私たちにとってはまるで故郷のようです。明るいスタートで、大都市に住んでいることに勇気が湧いてきました。

郊外を散策した後、リンが「さて、そろそろ帰ろうか」と言った。私は家に戻ろうかと思い、うなずいた。

「その通りだと思う」と私は言った。もう夜も更けてきたし、朝になる前に家に帰らなければならない。私と妹たちを一晩中起きさせてはいけないのは分かっているが、とにかく家に帰らなければならない。妹たちを連れて家に帰ろうとしたその時、マナコが何かに気づいた。

「みんな、あの生き物は何？」

マナコの視線を追って下を見た。通りの向こうに、何か動物がいた。二本の脚と赤い目を持ち、皮膚は銀色と金属色だった。金属の人ではなく、金属の動物かもしれない。一体どんな妖怪なのだろうか？ 突然、さらに四体のロボットが加わり、後を追ってきた。

「みんな」何かがおかしいと感じて、私は声を上げた。「あのロボットの生き物たちを追って、何が起こっているのか見てみよう」私が彼らの後を追うと、妹たちも心配そうに私の後についてきた。郊外で安全な距離を保ちながら、私たちが角を曲がると、奇妙な生き物たちが十代の少年を追い詰めているのが見えた。

その少年は浅黒い肌、つり上がった目、そして黒髪。まるで時が止まったかのように、胸がドキドキした。この少年には何かとてもハンサムなところがあった。私はまだ十代だったにもかかわらず、誰にも恋をしたことがなかったが、彼が追い詰められているのは明らかだった。

少年はロボットと戦おうとしたが、ロボットはあまりにも強く、圧倒されていくばかりだった。攻撃を受けるたびに、少年は次々とロボットに殴られ、そして地面に叩きつけられた。私たちは何が起こっているのかと恐怖に震え、息を呑んだ。

「彼を助けなければ」トモカは、自分が困っていることに気づき、甲高い声で言った。

「待って」彼女が助けようとする前に、私は彼女を止めた。「人間に妖怪だと思われてはいけない。母さんが言っていたことを思い出して。人間は妖怪を怖がるのよ」

「時間を無駄にできないわ、シラ」リンがポケットから飛び出し、チラッと声を上げた。少し苛立った様子で、顔が真っ赤になっていた。「あのロボットたちがあの子を傷つけたら、彼は死んでしまうわ」

「じゃあ、行くわ。アーニャは一度助けたけど、この子も救えるわ！」黒髪の妹が宣言した。トモカはロボットたちに向かって突進し、ヒーローフォームに変身してラプターの頭を蹴り、ラプターを倒した。他に選択肢はなかったようだ。私たちは変身を開始し、ロボットたちへの攻撃を開始した。

ロボットたちは吠え、顎をカチカチ鳴らして私たちに噛みつこうと飛びかかってきた。驚きの叫び声を上げながら、私はロボットの頭を蹴り、顎を砕いて横に倒した。ロボットは地面にガタガタと落ち、隣にはレイカがいてラプターに火の玉を投げつけた。近くでは、マナコが身を守り、棘のある球体を形成して数体のロボットを粉砕した。

「あのラプターはいいわ」と彼女は言った。

「金属人間たちよりも、思ったより頑丈そうだね」とトモカは同意したが、その直後にレイカはメカを殴り倒し、足を引き裂いた。

レイカはラプターを足元から遠ざけようとしていたが、ラプターがレイカを襲おうとしたので、レイカはラプターの顔目掛けて火の玉を投げつけた。

リン・ミュウはピンク色の魔法を全開に放ち、ラプターを魔法の炸裂で叩き落とした。ラプターは爆発して鉄くずと化した。最後の一匹のラプターが逃げようとしたが、私は手裏剣を投げつけ、完全に仕留めた。ようやく全員無事だった。辺り

には、粉々に砕け散ったラプターが散乱していた。見渡すと、少年が意識を失って横たわっていた。

「これからどうすればいいの？」とリンは尋ねた。

「彼をここに放っておけないわ」マナコは声を潜めて元の姿に戻り、少年のそばに歩み寄り、こめかみを触った。「もしあのラプターが戻ってきたらどうするの？」

「あの子を連れて行くなんて無理！」と私は叫んだ。「もし誰かに連れ去られたら？それにあのラプターの生き物たちも？一体どこから来たの？」壊れたラプターに向かいながら、トモカは壊れたヨーを拾い上げ、上面を見た。細部を詳しく調べていると、奇妙な文字で書かれた小さな碑文のようなものが見えたような気がした。とても未来的な感じだったが、文字は読み取ることができた。

「P.E.R.Iロボティクスよ」と彼女は呟いた。「変だわ。C.L.Iインダストリーには似てないわ」

「じゃあ、何なの？」マナコは妹に歩み寄りながら尋ねた。私たちはその言葉の意味が気になって、彼女のそばに集まった。

「このロボットは、奇妙な化学物質を扱っていない別の研究所の会社から来たんです」とトモカは言った。「あのロボットがどこから来たにせよ、私たちが救出したあの少年と何か関係があるに違いありません。」

「彼は自分が知っていることに対する答えを持っていると思いますか？」と私は尋ねました。

「早く確かめた方がいいわね」と智香は言った。私は息子を抱き上げ、夜が明ける前に家路についた。

第5章

家に着いた時には、もう日が暮れ始めていた。長い道のりだったし、あの奇妙なロボットたちとの戦いで疲れ果てていた。夜這いビルで戦ったロボットとはまるで別物だ。奴らは私たちよりずっと素早いし、機敏だし、力も強い。私が姉妹たちを連れて家に帰る間、レイカは一番強いので、少年を腰に担いでいた。母に、最初の夜に起こったことと、私たちが見つけた少年との出会いを話した。

母は私たちに怒るだろうと思ったが、間近で彼を見てとても驚いていた。

「人間をここに連れて来たの？」と彼女は尋ねた。

「彼は怪我をしています」と私は説明した。「私たちは彼を襲っていた奇妙なラプターと戦っていたんです」

レイカは、姉たちの言うことを聞いてあの人間を助けるべきだったと呟いた。

「他に選択肢がなかったのは分かってる」とトモカは罪悪感に苛まれながら言った。「あのラプターのせいで、人間は助からなかったんだから」

人間と話すべきじゃないって言い争おうと思ったんだけど…もしかしたら真ん中の姉の言う通りかもしれない。妖怪の世界でアーニャを宝石鬼から救った時の記憶が蘇ってきた。そして今、人間を救った時の記憶が蘇ってきた。

「タオルを持ってきて」と母が言った。「頭がひどく腫れて、あざもできているのよ」

私は母の言うことに従い、台所へ行き、布を水で濡らしました。そして、十分な量の冷水で濡らした布を母に渡し、息子の傷ついた体に当ててもらいました。私は息子の隣に座り、母に何が起こったのかを話し始めました。

「それで、あの奇妙なラプターたちが彼を攻撃するのを目撃しました。彼らは彼が何かを隠していると察知したのです。私たちは彼らを阻止し、彼らがP.E.R.I Roboticsという会社で作られたものであることを発見しました。」

母は息子の額を確かめ、「かなりショックを受けたみたいね。でも大丈夫よ」と言った。

「ああ」私はうなずいた。頭の中で記憶が蘇ってきた。「ラプターに追われたのも、状況を悪化させた」

「そもそも、あのラプターたちがなぜ彼を追っているのか、その理由を突き止めるべきだ」とトモカは言った。「C.L.I.の仕業ではないことは分かっている。だって、とっくの昔に壊滅させたんだから」

真ん中の姉の指摘は的を射ている。ラプターはC.L.I.の人間ではなく、妖怪捕獲のために作られた。ミュータントを捕獲してミュータント軍団として洗脳するためだけに人型ロボットを作っている。ラプターは壊滅させられたので、P.E.R.Iロボティクスは一体どんな技術を使っていたのか？それは大きな謎だった。

「ちょっと、マナコ、何してるの？」妹が花瓶にたくさんの花を育てているのに気づき、私は尋ねました。

「あら。彼を歓迎してあげないと」と彼女は言った。「フラワーグロースを使って花を育てて、この家に花の雰囲気を添えようと思ってたのに」

「私たちの力を彼に明かすことさえできないのよ」と母は言った。「彼は私たちを怪物だと思うでしょうから」

「大丈夫だよ」と私は言った。「彼は、私たちがこんな家にミュータントとして住んでいることを誰にも言わないから」

彼が弱々しくうめき声を上げているのが聞こえたような気がした。その声に私たちは気付き、ソファに座らせた男の子の方を向いた。「起きた！」目を開けた男の子は、私たちを見て、息を呑んだ。驚いたように立ち上がり、日本語で何か叫んだ。何を言っているのかは分からなかったが、幻覚を見ているのではないかとパニックになっているのだと思う。

「えーと…」と真奈子は言いかけた。練習通りの日本語で話し始めたが、彼には私たちの言っていることが理解できなかった。

「何を言っているのか分からない」と私は言った。麗華はうなずき、私の意見に同意した。人間は日本語のように様々な言語を話すことができる。まともな文章を話せるようになるまでには、少なくとも6年間は練習する必要がある。少年はまだ私たちに驚いて、私たちの変な顔を見て怯えていた。

「落ち着いてください」と母は息子に言った。「僕たちの出身地を教えてあげましょう」驚いた息子は母をじっと見つめ、母が話を始めると、ゆっくりと慎重に座り直した。母は僕たちの起源を話してくれただけでなく、シャドウサイドが人類を変異させて殺そうとするのをどうやって阻止しなければならなかったのか、その物語も教えてくれたのを思い出した。

「かごが岸に流れ着いた後、私はウミガメの卵を4つ見つけました。それらは小さな人間のようなカメの女の子に孵化していました。」

「あれは私たちよ！」マナコが声を張り上げた。私たちは全員彼女を睨みつけ、黙らせた。

小さな娘たちを一人で命を危険にさらしたくなかったので、巣穴に連れて行き、見守っていました。ここ数ヶ月、ハイブリアは私を含め、娘たちの成長に影響を与え、私を賢くしました。私は娘たち一人一人に名前を付け、魔法の力と武器の使い方を訓練し始めました。

母はリンが地球に落ちた経緯と、シャドウサイドの計画について語り始めました。私たちは妖怪界へ行き、知り合いの多くを助け、宇宙を含む様々な街や村を旅しました。ようやく目的地に着くと、母は私がシャドウサイドを完全に倒し、C.L.Iとそれにまつわる全てを滅ぼしたと教えてくれました。私たちの物語は何度も語られ、私たちを理解できない人々にも語り継がれてきました。

物語が終わると、彼は驚きました。「あれは今まで見た中で最も信じられない物語でした。」

「私たちと同じように英語を話せるんですね」と私は面白がって言った。彼が私たちと同じように違う言語を話せるなんて、驚きだった。

「実はできるんです」と彼は言った。「いつも一番日本語で話しているんです」

「ええ、お会いできて本当に光栄です」智香は眼鏡を直しながら微笑んだ。「あなたのような人にお会いできるのは本当に珍しいですね」

「それで、どこに住んでいるか知ってる？」とリンは尋ねた。「ところで、お名前は？」

私の名前はケノ。ケノ・ナギ。」

「キーノか？」マナコはニヤリと笑った。「初めまして。マナコといいます。」

私は恥ずかしさで顔を赤らめ始めた。「ごめんなさい。私の妹はちょっと変わっているんです。私の名前は白原です。」

「そして私は彼らの妖精の守護者よ」とリンは言った。「本当に私が見えるの？」

キーノは妖精に寄り添い、目を細めた。妖精が見えているのかどうかわからなかったが、彼は「ああ。君の姿も見えるし、声も聞こえるよ」と言った。

「リンが見えるの？」マナコは驚いて尋ねた。

「もちろんできますよ」と彼は言った。「私の家族は、妖精など精霊によく祈る習慣があるんです」

「知りたいことがたくさんあったのよ」とトモカは言った。「なぜロボットがあなたを追いかけているの？」

「ええと」と人間は切り出した。「奴らは私が見つけた日記を狙っていたから、私を追いかけていたんです」彼は日記を私たちに渡し、私が最初に中を見た。中には奇妙な人型の妖怪と、私たちの祖先である謎の粘体についての指示が書かれていた。とても丁寧に書かれていて、とても古いものだった。姉妹たちは私の後ろを見て、その日記が何の物なのかを見た。ロゴの名前には、私たちにとってとても馴染みのあることが書かれていた。

「C.L.I その本はC.L.Iから来たのですか？」と私は尋ねました。

「ああ」とキノは言った。「P.E.R.Iロボティクスが日記を盗んだのは、あの悪徳企業が悪事に利用することを知っていたからだ。俺はそれが起こる前に盗むことができた」

「つまり、盗んだってこと？！」

「君は分かっていない。会社はこの日記を使って、ミュータントモンスターを軍隊として、武器も含めて設計図を作り上げていた。そうすればディストピア的な終末が訪

れ、何も残らない。P.E.R.IとC.L.Iは敵対関係にあり、守るべきもの、あるいは利用すべきものを巡って争っていたんだ」とキノは厳しい口調で言った。「私は会社について色々調べていたんだけど、C.L.Iが数ヶ月前に倒産したから、行動を起こそうと決めたんだ」

「彼らはお互いに恨みを抱いていたと思いますか？」マナコは思った。「だって、シャドウサイドはあのロボット会社を本当に嫌っていたんですから。」

「それが問題なんだ」とキーノは言った。「奴らが何から隠れているのか知りたかったんだ。C.L.I.はどこに隠れていると思う？」

私たち全員に沈黙が訪れた。「ごめん、キーノ」と私は言った。「C.L.I.がミュータント軍団による終末戦争を起こすのを阻止できた。カナコという女性がシャドウサイドの計画を知り、私たちは彼女が軍団を解放するのを阻止できた。彼女が私たちに何をしようとしていたのか、多くのことが分かった」

「私たちの血をすべて抜き取り、私たちを兵士として洗脳してください」と智香は話し始めた。

「そして私たちは多くの危険を冒してきました。」

「うわあ」キノは息を呑んだ。「そんなことが起きて本当に残念だよ」

「大丈夫よ」と母は言った。「もう全部過去のことよ」

「それで、具体的にどこに住んでいるの？」と智香は尋ねた。「家まで送ってあげるわよ。」

「ああ、僕は東京メトロの通りにあるアパートに住んでいます。ここに母と住んでいます」とキノさんは言った。

「私たちが連れて行きますよ」と私は笑顔で言った。彼が神社から遠いアパートに住んでいることに、私はとても感銘を受けた。私たちは彼を家まで送り、彼のアパートへと歩き始めた。

長い道のりでしたが、リンを連れ、彼の居場所へ連れて行きました。一歩一歩歩くたびに足が痛くなりました。キーノは心配しているかもしれないと心配していましたが、大丈夫でした。私たちは忍者で、ジャングルでたくさん訓練してきたと伝えました。しかし、立ち止まった頃には、彼のアパートに着いていたことに気づきました。彼のアパートは小さいですが、とても素敵でした。私たちは人間に変装していましたが、リンは私たちを見守るために一緒に来たいと言っていました。リンは私たちに、他の花の上にあるアパートへ来るように合図し、私たちは階段を上りました。

「君たちが僕の家に入るのを喜ぶのは分かってるけど、僕はラーメンとか他のものしか作らないんだ」とキノは言った。「君たちはラーメンを食べるの？」

「ええ、そうね」とマナコは声を潜めて言った。ラーメンという言葉にお腹が空いてきた。「もっと辛くして！貝、イカ、海藻、肉、何でもいいわよ」

「お願いだから、私たちのことは他の人に言わないで」と私は懇願した。「みんな理解してくれない。研究所か動物園に入れられるかもしれない。もしかしたらサーカスかも」

「心配しないで」少年は私たち4人とリンを安心させた。「約束するよ。日本の妖怪はみんな神話に過ぎないんだから」

ケノはウミガメは貝類以外ラーメンは食べないと思っているに違いない、と私は確信していました。実際、私たちが人間の食べ物を食べることにケノは驚いていました。彼は私たちを家の中に招き入れ、ここは素敵な場所だと分かりました。彼は私たちを家のあちこちに案内してくれました。彼の部屋には妖怪のスケッチや小さくてかわいいロボットがありました。彼はそれをLOVOTと呼んでいたと思います。彼は自分で描いた妖怪のスケッチを見せてくれました。どれも奇妙で怖い見た目ですが、上手に描かれていました。歌を歌う花のつぼみ、背中に白い翼を持つ翼のある人々、

水中を泳ぐ色とりどりの鯉のスケッチなどがありました。まるで本物の伝統画のようでした。ケノはきっと素晴らしい画家になったに違いありません。

「あの妖怪、すごくいい感じだね」と、私は絵を受け取りながら認めた。「すごく…面白いね」

「ああ、そうだね」と彼は言った。「それ以来、たくさん描いているよ」

「それなら」リンが声を張り上げながら私のそばに飛んできた。「このロボットが誰のものか調べなきゃ。C.L.Iじゃなくて、P.E.R.Iロボティクスだよね？」

「まさにその通りです」とトモカは言った。彼女はロボットの顎を調べ、拡大鏡で刻印をよく見ていた。「90年代あたりに作られたような気がします。もしかしたらC.L.I.よりも古いかもしれませんね」

「そうだな、何が起こっていたのか調べなきゃ」と私は言った。「また危険にさらされるかもしれないから」

「その通りよ」とリンは言った。妖精はこれから何が起こるか、きっとわかっていた。誰にもわからないだろう？日本を恐怖に陥れるような、新しいタイプの混血種かもしれない。もっとひどいことに、人間を捕らえて青い粘液を体内に注入するかもしれない。キーノは私たちのことを誰にも言わないと約束してくれる。これは私たちの大切な秘密よ。でもまずは、帰ったらお母さんにこのことを話さないと。

第6章

ケノは、彼のアパートがかなり広くて快適だから泊まるように誘ってくれた。初めて人間に会ったなんて信じられなかった。でも、彼への憧れが拭えない。彼はとてもハンサムで、黒髪だった。心臓はドキドキと鳴り響き、顔はピンク色に染まり、傷だらけの目が開きそうだった。10代なのに恋に落ちたことなんて一度もなかった。姉たちは皆、私が彼に夢中になっていると勘違いしていた。

ミッションのことを忘れそうになった。いや、忘れられない。何が起こっているのか、P.E.R.Iロボティクスの中に何が隠されているのか、その秘密に集中する必要があった。そもそもラプターが彼を襲っている理由、そしてC.L.IとP.E.R.Iの間にどんな恨みがあるのか？

昨日から、彼の家に慣れ始めたところだった。マナコとトモカはテレビで新しいアニメを見ていた。番組の人魚姫のアニメで、私たちが食べたたまみラーメンが題材だった。キーノのスケッチブックに描かれていた絵をいくつか見てみたんだけど、レイカはキーノが持っていた小さなロボットを気に入っているみたい。メッちゃんがあんなに嫉妬するなんて、想像できるかな。

彼が言った言葉を思い出しました。「君のメッチャンはポクチャンに嫉妬すると思うかい？」

「たぶんね」と私はクスクス笑った。「彼女は私たちがあなたのあの可愛いロボットの友達だと思うでしょう！」

「見える？」マナコが叫んだ。妹が人魚姫のショーの不思議な魔法の箱を見ているのを思い出した。「あの人魚姫はどうやってあの魔法の箱に入ったの？ 生き返るの？」

「そうでもないでしょ？」キーノが妹を訂正した。「あれは人が作った録画されたエピソードだよ」

「あの人魚が私を無視するのも無理はない。」

「いずれにせよ」とトモカは切り出した。「P.E.R.Iロボティクスへ向かって秘密を暴き、C.L.Iがなぜ彼らにそんなに恨みを抱いているのかを突き止めるつもりよ」

明日の夜から会社で答えを探し始めるべきだと伝えるべきだったと思い出し、計画としてはそうすることにした。

夜遅くまで一緒に過ごした後、ようやくベッドに入った。キーノがくれた予備の布団で、私はもう寝ていた。布団は気持ちよさそうで、リンも机の上の小さな枕で寝ているようだ。朝になるとキーノはもう起きて、家の仕事をしていた。私たちとキーノのお母さんは、長い一日の仕事だったのでまだ寝ている。

ドアをノックする音で目が覚めた。疲れた私は目をこすり、青い髪を顔から払いのけて、誰がノックしたのかを確認した。最初に尋ねたのはキーノだった。「誰だい？」

「それはあなたの隣人です。」

「中野さんだ」と彼は声に見覚えがあったので言った。彼は立ち上がり、シャツとズボンを着始めた。「君たち、隠れられるか？」

もちろん、もう済ませた。彼のクローゼットの中だ。箱と服で、とても狭かった。智香と真奈子はぎゅうぎゅうに押し込まれ、麗華は反対側で足首を痛めて、私は床に両足を壁につけて、凛は私の頭の上に乗っていた。言ったように、クローゼットの中は散らかっていた。耳を澄ませると、外からドアが開く音が聞こえた。

「やあ、中野さん」とキーノの声が聞こえた。「どうしたんだい？」

「最近、絵を描いたり研究したりと、とても頑張っていたのにね」と彼女は言った。「なのに、猛禽類がまた道路で目撃されたんだって」

「ラプター？」キノは困惑しながら尋ねた。

緊張してきて、音を立てないように口を覆おうとした。真奈子と智香も汗だくで、麗花は楽になるよう努めていた。私の頭の上にいる凛は、髪を引っ張って体を支えようと必死だった。少し痛かったが、痛みを和らげるしかなかった。

「本当にごめんなさい、ナカノさん。本当に大変なスタートでした」とケノは謝った。「ラプターがたくさんいて、学校の勉強もしなければならなかったんです。それに、ウィング・クランが来てからずっと帰ってきてくれなかったんです」

「ええ」と女性は頷いた。「かなり迷惑な存在でした。研究に必要な重要な技術や他人の家を盗もうとしていたんです。リーダーはとにかく暴力的で、街を乗っ取ろうとしていました。警察は彼女を捜索していましたが、痕跡は見つかりませんでした」

翼族？何の話？ギャングか何か？ふと、マナコがくしゃみをこらえる音が聞こえた。少し我慢してみたけど、なぜかぶつかり合って音を立てた。

「あれは何だったの？」と中野夫人が尋ねた。

ああ、いや。きっと聞こえていたに違いない。ドアが開く音が聞こえて、私と妹たちはびっくりして立ち尽くした。でも私たちはまだウミガメの姿のままで、ブローチはキーノの机の上に置いてあった。ブローチは取れなかったけれど、急いで行動しなければならなかった。私は口パクで「あ、そうか」と呟き、動かず、おもちゃのようにじっと瞬きもせず息を止めてじっとしていた。巨大なおもちゃが動き出して飛び出してくるなんて、なんて不思議なんだろう。クローゼットのドアが開くと、そこにはナカノ夫人がいた。顔に小さなしわがあることから、50代前半くらいだろう。彼女は私たちを見て、私は動かないようにじっとしていた。

瞬きもせず、呼吸もせず、腕も動かさないようにしましたが、不安で心臓がドキドキと激しく鼓動していました。

「それはあなたのおもちゃ？」彼女はリンを抱き上げながら尋ねた。

キノは緊張しながらうなずいた。彼女は優しく答えてくれたようだが、キノは私たちの代わりに答えなければならなかった。「もちろんだよ」と彼は嘘をついた。「空手の技を身につけた、くノ一のぬいぐるみだよ」

空手？そう言ったのね？中野夫人はニヤリと笑ってリンを床に置き、真奈子を抱き上げた。真奈子は緊張して汗をかき、辺りを見回した。真奈子はリンの瞬きに気づいていなかった。

「本当に生きているように見えますね」と彼女は微笑んだ。

彼はすぐにマナコをつかんでクローゼットに戻し、ドアを閉めて、私たちが少し動けるようにしました。

「確かにそうだね」と彼は急いで言った。「もう行った方がいい。僕には話が山ほどあったんだ」彼は彼女を丁寧にドアの方へ押しやった。

「まあ、無理はしないでね」と中野夫人は言った。「猛禽類が来ても大丈夫なように、安全第一に行動しなさいよ」

ドアが閉まる音がした。隣人はもう出て行ったのだと分かった。クローゼットから出てくると、大きな山になった。箱が床中に転がり落ち、私たちはゆっくりと足元まで這い上がった。

「危なかったわ」マナコは叫び、頭を上げて飛び出した。「悪気はないけど」

キーノは後頭部をこすりながら、緊張した様子で笑った。「心配しないで、大丈夫だよ。」

「私たちがおもちゃみたいに振る舞っていたなんて、変じゃない？」と智香は尋ねた。「すごく恥ずかしかった！」

落ち着きを取り戻し、立ち上がってキーノに目を向けた。ラプターと、何かの部族の声が聞こえてきた。ウィングだと思う。

「ねえ、ケン、考えていたんだけど」私は任務を思い出そうとしながら言った。「P.E.R.Iが私たちの血を求めて狙っているんじゃないかって気がしたの」

「なぜそんなことを言うのですか？」

「ずいぶん昔のことよ」とトモカは言った。「C.L.Iは私たちを武器にして、私たちの血を使おうとしていた。そのためにはシャドウサイドを止める必要があった。P.E.R.Iに捕まる前に止められるかもしれないわ」

「簡単じゃないだろう」とキーノは言った。「会社は誰でも突破できるよう、非常に厳重な罠を仕掛けている」

罠…C.L.I.と同じだ。会社に侵入するには、以前破壊した会社と同じことをしなければならない。だが今回はP.E.R.I.ロボティクスを破壊することはできない。それがキノが研究していることだ。

「あの猛禽類に刻まれた碑文について母に話さなくてはならない」と私は言った。

「ちょっと待て」とキノは言った。「君たち、何が起こっていたか分かってないじゃないか」

「試してみるしかない。妖怪の世界を救ったが、人間界が平和に暮らせるなら、人間界も救えるはずだ。」

レイカはうなずいた。「人間界を救えるなら、P.E.R.I.を止める方法もあるはず。」

「頑張ってくれよ、みんな」とキーノは小さくため息をつきながら言った。私たちはアパートを出て、家路についた。

ようやく家に着くまで、そう時間はかからなかった。キーノズからずっと歩いて帰ってきたので疲れていたけれど、ストレッチは気持ちよかった。一番乗りで店に入った。

「ただいま。」

「おかえりなさい、お嬢さんたち」と母が私たちに挨拶した。「女の子ってキーノとどう合うの？」

「そんなに悪くなかったよ」とマナコさんは言った。「スケッチもたくさん描いていたし、可愛いロボットのおもちゃも持っていたよ」

「メッちゃんはきっと嫉妬するわよ」とお母さんは小声でくすくす笑いながら言いました。

「とにかく、母さん」と私は話し始めた。「P.E.R.I.についていろいろと調べてきたんだ。見つけた碑文は、きっとこの状況と関係がある。C.L.I.と同じように、あの会社も次は私たちを狙っているかもしれない。何をされるか分からないし、また実験されるかもしれない。何が起こっているのか、何らかの答えを見つけなければならない。碑文を見て、あの粘液と何か関係があると思ったんだ」

「君の言う通りだと思う」とイキオイは言った。「何が起こったのか、もっと話すべきだった。君の血のこと、そしてC.L.Iが君を追っている理由を。君たちがまだ幼虫だった頃、私は森で果物を探してうろついていたんだ。そこで何人かの人間に出会った。彼らはベリーのような形をした奇妙な花を集めて、それ以来ずっと研究していたんだ。彼らの本を読んで、あの粘液が作られる理由を知った。粘液は水、放射性廃棄物、そしてそれを混ぜ合わせたあの謎のベリーから作られる。それが私たちを今の私たちにしたんだ」

「もしまだあの粘液が残っているなら、人間を変異させないようにしないと」とマナコは言った。レイカもそれに同意した。彼女は新たな敵を倒す準備ができていたからだ。私たちの計画はシンプルだ。P.E.R.Iを見つけ出し、私たちの血と起源を知ることだ。

「何が起こっているのか、必ず調べる」と私は母に約束した。「何が起こっているのか、必ず調べる」そう言って、私たちは新しい会社の証拠を探しに出発した。

第7章

私と妹たちがP.E.R.I Roboticsを見つけるのに少し時間がかかりました。キーノは、新宿と渋谷に近い中野区にあると言っていました。私は妹たちをその建物があるはずの場所へと案内し始めました。キーノは、C.L.I.の長方形とは違って円形の建物だと説明していたので、きっと見つけられるだろうと思いました。

彼は私たちに C.L.I のフロアが印刷された設計図をくれましたが、1 つの部屋が塗りつぶされていました。まるで人間がその部屋に入らないように言ったとでも言っているかのようでした。

立ち入り禁止の標識があり、建物の周囲には有刺鉄線のフェンスが張られていた。そこへ行き、その秘密を探らなければならない。ペリロボット工学は維持されている。母は、ミュータントになった僕たちが街中よりも屋上にいる方が安全かもしれないから、屋上に留まるべきだと教えてくれた。

屋上に登ると、ほぼ山ほどの大きさの円形の球が見えます。

「C.L.Iによく似ているけど、完全に円形だ」と私は呟いた。「本当にここなの？」

トモカは建物を分析し始め、素早く確認した。「ここだと思う。本当にあの建物に入るつもりなんだ。でも、警備員が周りにいて、中に入れないよ」

「どこから入ればいいの？」マナコは尋ねた。

「ホールにはセキュリティレーザーがたくさん設置されていて、警備員も数人いる。9時くらいに閉まるんだ。キーノが教えてくれたはず」とトモカは言った。「レーザーで細かく切り刻まれてしまうし、魔法の箱に監視されてしまうから、こっそり入ることはできないわ」

「確かに、それはその通りだ」とシラは言った。「でも、市の敷地内に不法侵入することはできる。科学者がもう一度実験してみましょう? 再び血を流させるわけにはいかないのです」

「ああ、その通りですね」とマナコさんは言いました。

「さて、どうしようもないですね。自分たちで宅配便で送るわけにはいかないんです」とリンは答えた。

どうして今までそんなことを思いつかなかったんだろう？ 宅配便は完璧な変装術だ。辺りを見回し、空箱を積んだ配送トラックを見つけた。私たちは別々の箱に隠れ、私とリンは一つの箱に入った。中はかなり暗く、泡だらけで息苦しかった。別々の箱に入っていた姉たちも同じことを考えていた。

ドスンという音が聞こえるまで、私たちはじっと静かにしていた。建物の中で、私とリンが入っている箱を、人間が引きずっているのだ。心臓は太鼓のように激しく鼓動し、落ち着くために何度か息を吸った。箱の中では息が苦しく、汗が嵐のように噴き出していた。とにかく箱から出たいと思った。でも、出られない。ドスンという音が聞こえ、体が震えた。覗き込むと、そこは倉庫だった。

「入りました」リンはできるだけ低い声で言った。「もう出てきなさい」

見渡すと、マナコ、トモカ、レイカが箱から出てきて、よじ登っていた。中は息苦しいほど狭かった。風通しのよい隙間もなく、照明は暗いが、ここは倉庫内らしい。先ほどまで見ていた大量の段ボール箱とロボットラプターが、今もまだ搬入され続けている。少なくとも、倉庫内には人間は入っていない。

「これがP.E.R.I Roboticsの姿なの？」マナコは驚いて辺りを見回しながら尋ねた。

「そろそろ近づいてるわね」と私は言った。「みんな、一緒にいてね」私は姉妹たちに合図を送り、メインロビーのドアへと向かい始めた。

中に入ると、本当に驚きました。天井は白い円が描かれたカラフルなライトのようで、下の通路も光っていました。警備員がいなくて本当に良かったです。きっと夜間は閉鎖されているのでしょう。周りのロビーはとても広く、目の前に広がるほどでした。リンが階段まで案内してくれて、私たちは落ち着いた雰囲気で階段を上り、各階へと進んでいきました。まるで魔法のように、まるで階段が勝手に動いているようでした。

廊下を歩き回り、答えを探して37階の研究所を見つけた。私たちの行動を逐一監視する監視ビームとカメラを避けなければならなかった。それを避けるには、カメラの後ろに隠れなければならなかった。そしてトモカは、蝶の気をそらすためにレンズにロボットの蝶を置くというアイデアを思いついた。

「私たちが入ったときとは全然違うね」とマナコさんは思い出した。

「ああ」と私は答えた。「でも、ここはミュータント兵士とは関係ない。あの粘液を見つければ、何が起こっているのか分かるはずだ」私たちはそこへ歩いて行き、もう一つの扉を見つけた。メインの研究所だ。

中に何があるのか知りたかったが、そもそもラプターがなぜ来たのかを理解する必要がありました。私たちはゆっくりとドアを開け始め、研究室へと足を踏み入れました。

中を覗いてみると、たくさんのコンピューターと、ぐるぐると回り続ける巨大な次元の立方体があって驚きました。床にはガラスのタンクがいくつも散らばっていて、見覚えのない奇妙な機械もありました。排水機ではなく、ガラスの檻のようでした。もしかしたら、私たちと同じように、野生の妖怪を輸送するためのものなのかもしれません。

「まるでテレビゲームの中にいるみたい！」マナコは尻尾を横に振りながらキーキーと鳴きました。

「辺りを見回してみましょう」とリンは覗き込んだ。「何か見えたら、粘液が作られている場所へ連れて行ってくれるでしょう。」

それで、私たちは辺りを見回し始めた。リンは光の群れに飛び上がり、ガラスに映った自分の姿に気づいた。レイカはガラスの水槽の一つを手に取って中を見ると、空っぽだった。マナコはラプターを数匹見つけ、しばらく頭で遊んでいたが、それが動き出してマナコを怖がらせてしまった。私は机のところへ行き、粘液が作られている設計図を見つけた。目を細めて、よく見てみた。目その言葉に。

- 水
- ゼリー
- イオン
- のり
- ウニラ・フラワーズ

衝撃で息を呑んだ。ユニラの花。一体ユニラの花って何？言葉を失いながら、ユニラの花のファイルを眺めていると、花のイラストを見つけた。小さな実のように見えたが、紐から判断すると茎だろう。

「みんな、こっちよ！」僕はトモカに目を向けた。彼女はパソコンを見つけて入力していた。「あそこの机に、不思議な魔法の箱が置いてあったの」彼女はそれに気づき、私たちのDNAについて調べ始めた。

「智花、何を見つけたの？」麗花が私のそばに立っている間に私は尋ねた。

「粘液にはたくさんの数字が書いてあるわ」と彼女は翻訳した。「ほとんどは処分されたのよ。数字をコード化してみることはできるけど、時間がかかるかもしれないわ」

うなずいて、私たちは待ち始めた。智香は邪魔されるのがあまり好きではないので、天才が全てを理解するまで辛抱強く待つ必要がある。リンは缶の山のそばを漂い、ガラスに書かれた文字を見つめた。

「C.L.I？あの人たちはC.L.Iから缶を盗んだの？」

「そんなはずはない」リンは甲高い声で言い、その隣を飛びながら言った。「もしそうだとしたら、あの人たちはC.L.Iのことをずっと前から知っていたことになる。彼らはずっと前からライバルだったのに、私たちはそれに気づかなかった」

頭の中は混乱し、何が起こっているのか分からなかった。C.L.IがP.E.R.Iロボティクスの敵なら、なぜ何のためにスライムを盗むんだ？遠い昔のことだったと記憶している。シャドウサイドは我々を捕らえて血を吸い、ミュータント兵士の軍団を作り上げ、世界を征服しようとしていた。だが、我々は彼女を屋上から突き落として死なせ、彼女を死なせたのだ。

「あ！」智香がようやく声を上げた。「情報を得たわ」智香のそばに集まってみると、実験名が4つあることに気づいた。

E-14.

E-19。

E-64。

E-9.

「あれは一体何を意味するんだ？」マナコは尋ねた。「あれは実験だったのか？」

「ああ」とトモカは答えた。「ずいぶん昔の話で、私の計算では、この粘液が私たちをハイブリッドにしたんだ」彼女は画面をスクロールさせ、青い髪の少女のホログラム映像を映し出した。「E-14は脚を尻尾に変え、鳥の翼を持つことで知られている。彼女の力は水を操り、毒ガス以外の液体を呼吸できる。さらに、白い翼は空を飛ぶのに優れ、雨にも強い」

「あれはシラだ」とリンは頷いた。「サラマンダーの鱗を持つのはレイカ。彼女の力は火を操るが、手に触れると山火事を引き起こす。だから手袋をはめているんだ。ここにいる独特な尻尾を持つのはアホロートル。あれはトモカ。浮遊や空中浮遊といった物理能力に長けていて、何よりも人の心を感じることができる。ただし、人間だけだよ。そして最後に、昆虫のDNAを持つマナコ。彼女は巣を張ったり擬態したりできる。生命を増殖させたり、棘のある球体に変身したりもできる。」

「それは…すごい…」マナコは覗き込んだ。

「それだけでなく、頭に角が生えているということは、あなたは『鬼滅の刃』と呼ばれる妖怪なのですよ」

「他に見つけたものを見て」賢いウミガメは新聞を掴み、私たちは皆で大衆に目を向けました。C.L.I私たちが孵化する何年も前に焼け落ちていました。よく見てみると、数匹の猛禽類が研究所から残骸を運び出し、P.E.R.Iロボティクスのトラックに運んでいるのが見えました。

「彼らもここにいたの？」リンは息を呑んだ。

「そうでしょう。カナコが研究所に放火した際に、他の会社がC.L.Iの残骸を盗んだんです。研究所が焼け落ちた後、炎を逃れた物体はP.E.R.Iロボティクス社に運ばれ、それ以来ずっと彼らがスライムとプロジェクトH.Y.B.R.I.Dの研究をしていたんです。」

「それで」と私は切り出した。「カナコが注入した動物のDNAのおかげで、私たちはそれぞれ違う特徴を持っている。こんな風に私たちの血統を知る人はいるのだろうか？一体誰なのだろうか？」

突然、リンは何かが近づいてくるのを感じて見回しました。恐怖で目を見開き、翼は固まり、心臓は激しく鼓動していました。リンは私たちの方を向いて、「仲間が来たわ」と言いました。

振り返ると、頭に翼のマークがあり、マスクにつり上がった青い目をした黒いマントを着た忍者の一団が天井から飛び降りてくるのが見えました。

「忍者？」智香は息を呑んだ。「日本で？」

「私たちの他にも忍者はいるの？」マナコは尋ねた。

「今、行動する時間はない！」と私は叫んだ。「みんな、変身！」頷きながら、私たちはヒーローの姿へと変身した。リンもそれに加わり、完全な姿へと変身した。忍者たちは古風な刀と手裏剣を振りかざして襲い掛かってきた。私は水属性の攻撃で忍者たちをブロックし、その後、身をかわして蹴り倒した。

「思ったよりかなり強そうに見えるよ」と私は認めた。

「かなりいいですよ」とマナコさんは答えた。

「お前ら、俺たちに何の用だ？」リンは怒って尋ねた。「ここで何をしているんだ？」

彼らはまだ返事をせず、私は顔にキツネの模様をつけた細身の女と顔を突き合わせていた。彼女は私たちに向かって突進し、私と妹たちは彼女の刃をかわした。レイカは忍者めがけて火の玉を放ったが、忍者はそれを弾き返してレイカを吹き飛ばした。トモカとマナコは恐怖に息を呑み、女を睨みつけた。叫びながら、二人は彼女に突進した。彼女は二人を蹴り飛ばし、電気手袋で感電させた！？

姉たちは二人とも床に倒れ込み、衝撃で体が動かなくなり、立ち上がることができませんでした。

私はうめき声をあげながら、彼女の顔を睨みつけながら、彼女の刃に抵抗した。しかし、足が震え、頭から汗が流れ落ちるのを感じた。ああ、彼女はあまりにも強すぎた。彼女は私の腹を蹴り、私は苦痛に呻き声を上げた。そして、姉妹たちとリンが私の横に投げ飛ばされた。私たちは皆、完全に敗北した。

「ああ、スライムだ！」トモカは叫んだ。「ハイブリアを捕まえた！」

仮面の女が日本語で何か言った後、彼女と忍者たちは灰色の煙の中に消えていった。私は目口もきいていたが、一度注意すると、彼らはいなくなった。コンピューターのビープ音以外、周りはすべて静まり返っている。

「皆さん大丈夫ですか？」私は弱々しく頭を上げて尋ねた。智香は何も言わず、小さく頷いた。麗香は、あの女が私たちに与えた苦痛に耐えながら、歯を食いしばっていた。

「そう思うわ」マナコは言った。彼女のふわふわの髪は電気でパサパサになっていた。

「最高だわ」リンはうめいた。「奴らは粘液を盗んで逃げたのね」私はただそこに立ち尽くし、私たちに注入した謎の粘液がどうなったのか分からなかった。今は謎の人物に持ち去られたようだ。いや、翼忍者だろう。奴らが誰であろうと、あるいはどこから来たのかはともかく、友好的ではないのは間違いない。

第8章

粘液を取り出せなかった後、何時間もゆっくりと歩いて家に戻り、朝になって母に何が起こったかを話しました。私たちはひどく傷ついていたので、母は持ってきた包帯で傷を治してくれました。

幸運なことに、目が目くらみのせいで赤くならなかった。もう片方の目を失わないように、痛みを和らげる目薬を点眼しなければならなかった。そうすれば、もう片方の目を失うことはない。もう片方の目は、私に残された唯一の視力なのだから。姉たちは…麗花は足に擦り傷、頬には紫色の痣ができていた。智香は腹甲に数カ所の痣ができ、少しひび割れていた。彼女は、ウミガメの甲羅は脱皮するとすぐに回復するが、ひび割れた傷跡になることもあると教えてくれた。真奈子は頭に大きな打撃を受けたため、頭に包帯を巻いていた。

「皆さん、本当に幸運でしたね」と彼女は言った。声は穏やかだったが、冷たい視線を感じて、私は身震いした。

「彼らはどこからともなく現れたんです」とマナコさんは言った。「頭に翼のマークがあって、とても友好的とは思えませんでした」

「奴らはスライムを奪って、私たちをあっという間に倒したのよ」と布団に横たわりながらトモカさんは言った。

「しかし、私たちは気づいたことがあります」と私は言いました。

"それは何ですか？" 母に尋ねた。

「ハイブリッド粘液。その粘液に使われていた成分が含まれていることが分かりました。それが、なぜその粘液が私たちの静脈に注入され、力を与えたのかを説明しています。」

「なるほど」母はため息をついた。深く息を吸い込み、目を閉じた。皆、不安げな表情で返事を待った。「我々の存在を知っている最強の敵がいる。無名の一族の忍者たちは、あなたたちが対峙したC.L.Iとは違い、熟練しているかもしれない。戦争中だから、娘たちよ、覚悟しておけ。訓練は想像以上に過酷で厳しいものになるだろう」

何日回復したのか、どれくらい訓練を続けなければならないのか、さっぱり分からなかった。晴れた日は訓練を続けるうちに暑くなってきた。訓練はみんなやらなければならないことだった。母は夜に訓練していいとは教えてくれなかったのに、朝晩両方？なんて残酷なんだろう。避けたり、魔法を使ったり、謎の翼族と対峙したりと、訓練のたびに筋肉が痛むのを感じた。

あの忍者たちは友好的ではなかったから、どこから来たのか分からなかった。私たちは食事も睡眠も、遊ぶ時間もなしに修行しなければならなかった。母は私たちに厳しい修行を強いた。一生懸命頑張ってきた修行のせいで、額に汗が流れ落ちるのを感じた。その近くでは、リンが神社のそばに座って、心配そうに私たちを見守っていた。リンは本当に助けてあげたかったのだが、母はここで療養しなければならないと言った。

「どれくらい？」マナコは気を失いそうになりながら尋ねた。

「もうすぐよ」と母は厳しい口調で言った。「こんな風にあなたを倒したら、忍者たちは休まないわよ」

僕は大きく息を吸い込み、炎を放つレイカに突進する前に、彼女の炎を消し、蹴りを放つことができた。

「あなたが頑張り続けるなら、私たちはいつもこれをやるわよ」と母は軽率に叫んだ。

プレッシャーは大きかったけど、みんなベストを尽くしました。智香はもう限界で、真奈子は気を失いそうでした。まるで3日間、寝ても覚めても休めないような感じでした。トレーニングは本当に大変です。

「ちょっと……休んで……いいかな……？」息を切らした呼吸の合間に。

「あなたたちが全員死なない限り、ウィング一族は安息できないわ」母は冷笑した。私はすすり泣き、震えながら地面に倒れ込んだ。恐怖で目がぱっちり開いた。こんなにひどい船尾は初めて見たけど、本当に怖かった。泣きそうだった。やっと母が私たちの怯えた表情を見て、ため息をついた。

「おそらく1時間くらいでいいでしょう。」

安堵のため息をついた。連日のノンストップのトレーニングの後、ようやく1時間だけリラックスできる。私は目妖精の友達が私のそばを飛んできてくれた。「練習でかなり疲れたでしょうね」と彼女は私たちの体調を心配しながら言った。

「わかってる」私はため息をついた。リンから目を離すことができなかった。「でも、生まれて初めて忍者の集団と対峙したの。奴らは私たちよりもっと腕が良さそうだった。私ならもっと強くなれたのに」

ため息をつきながら、妖精は私の手を持ち上げて立ち上がらせた。「きっと大丈夫よ」と、希望に満ちた笑顔で言った。「翼の紋章を持つ忍者は手洗いけれど、あなたなら大丈夫よ」

立ち上がると、リラックスして気持ちを落ち着かせ、痛む筋肉を休めようとした。次はどれくらい敵を攻撃することになるのか分からなかったが、とにかく辛すぎた。マナコとトモカは二人とも地面に倒れ、かなり疲れて目を閉じていた。

レイカは、訓練していたのに残念だとボディランゲージで言いながら、ぶっきらぼうに言った。

「そうするしかなかった」私は彼女を安心させ、落ち着かせようと言った。「ウィング・クランは、それが何であれ、倒すのはかなり難しい。私たちはC.L.I.を阻止し、世界を救ったのだから」

「でも、私たちは適応しようとしていたにもかかわらず、新しい敵に直面することはありませんでした」と智香は頭を上げて言った。

「あの忍者……」マナコはため息をつき、あの謎の人物たちに初めて出会った時の記憶を思い出した。金色の瞳はまだ傷ついたままだったが、その後私たちを襲った翼族の忍者たちのことを思い出し、ひどく怖くなった。「どこから来たの？」

「知らなかったわ」リンは、頭にかすかな苦悩が浮かび上がってくるのを感じながら言った。「奴らが何者であれ、重要な技術を盗むことで何かをしでかしたに違いない。でも、あなたの血を狙っているかどうかはわからないわ」

「だめ、だめ」と断った。リンに「血を抜いて」と言われるのが嫌だった。前回姉たちにされたのとは違う。「そんな風にしないで」

「私が言いたかったのは」と彼女は自分が何を言っているのかに気づきながら続けた。「彼らは別のものを狙っているの。ペリ「ロボット工学」

ドアの音が聞こえて、私たちは注意を引いた。誰だか分からなかったが、チェックインしようと向かった。驚いたことに、それはキーノだった。私は顔を真っ赤にした。目は大きく広がっています。彼はここで何をするつもりでしょうか？

「はい？」私はドアを開けた後に答えた。

「やあ、シラ」彼は私に挨拶した。「かなりストレスを感じているみたいだね」

「ああ」私はため息をつき、彼を受け入れた。「母さんは、あの…翼のマークを持った謎の人々の襲撃の後、私たちに24時間訓練をさせたのよ」

「ウィングマーク？」キーノは尋ねた。彼はその言葉について考え、そして息を呑んだ。「ウィング一族に遭遇したのか？」

「それはそういう名前なの？」マナコは頭を上げて尋ねた。

「ああ」彼は頷いた。彼はずっと聞いていて、私たちが目撃したことを理解してくれていた。「翼族は非常に強力だ。人間が逃げ出して忍者に殺されることはあり得ない。でも、君はどうやって生き延びたんだ？」

「あのね、P.E.R.Iロボティクスに入ったとき」とトモカは話し始めた。「ハイブリッド・ウイングを盗んだウィング・クランに待ち伏せされたの」

「ハイブリッド・ウーズ？」

「それが私たちを作ったんです」と私は答えた。「14年前に私たちを変異させたのと同じ粘液を発見し、その起源を理解することができました。このハイブリア滲み出る「…すべて奇妙な材料で作られていて、ウニラフラワーと呼ばれる奇妙な花もあります。」

「ユニラの花？」

「ええ」と智香は頷いた。「乾燥した場所に生えている、エイリアンのような花なんです。粘液を青く輝かせて、その中の動物のDNAを繋ぎ合わせます」

「このウニラの花について今まで聞いたことがないのですか？」

少年は私たちをじっと見つめ、首を横に振った。「いいえ。何も見たことも聞いたこともありません。ウニラと言うのはとても奇妙に聞こえました。」

「もちろんだよ」と私は言った。「ハイブリアで追加されたんだ。盗まれるまではね」

「ちょっと待って。つまり、私があなたを作ったハイブリッド・ウーズだったってことか？」

「もちろんよ」とトモカは言った。彼女は研究所に侵入した際に入手したホロパッドと設計図を取り出し、あの忍者たちがどこから来たのか、そしてそもそもなぜキャニスターを盗んだのかを解明しようとしていた。「そして、私たちが見つけた唯一の手がかりは忍者から盗んだものだった。なぜこのウィング・クランはこんなことができたのか？ なぜ彼らはあんなに残酷なのか？」

キノはため息をつき、深い憂鬱が心に沈んだ。「それが彼女の掟だったからよ。裏切る者は全て殺し、権力のために盗む。」

「どうして分かったの？」とマナコは尋ねた。

「何十年も東京を恐怖に陥れてきた盗賊団だ」と毛野は頭を下げて説明した。彼は何世代にもわたって、家系から翼一族の話を聞き続けてきた。「母が翼一族のことを全て話してくれた。翼一族は勝利を収め、暴力的で、非常に攻撃的な一族だ。彼らはアジア軍と戦ったことがある。彼らは翼一族への入団を希望する優秀な人材を募集していた。彼らのリーダーは黒薔薇悪霊、通称翼爪。彼女がまだ幼い頃、別の一族、ハート一族に家族を殺されたのだ。」

「心臓？」と私は尋ねた。

「ハート一族は、守護に仕える、最も高潔で平和的な一族の一つです。彼女はハート一族に養子として迎えられ、一族の姉妹となりました。しかし、それ以来、

彼女はハート一族を滅ぼし、自らの家族を滅ぼしたとして、忍者たちをハート一族に敵対させました。」

残りの皆は沈黙し、キーノの言葉を思い出した。忍者がなぜスライムを盗んだのかを突き止めるだけでも、ウィングはかなり破壊力がある。宇宙と街を破滅させたくはないが、奴らを止めなければならない。

「彼らが何をしようとしているのかが分かれば、彼らが何を必要としているかが分かるだろう。」

「だめよ」と母は言った。「危険すぎるわ。あの忍者に捕まったら命を落とすかもしれないのよ。きっと傷つけられるわよ」

「私たちならできるわ、母さん」と私は厳しく言い張った。「やってみよう。キーノはウィング一族のことを昔から知っているから」

母の返事を待ったが、もしかしたら、忍者の衣装と鋼鉄の刃を振り回す人間たちと対峙しているのだと自覚しなければならないのかもしれない。妖怪界の妖怪たちと対峙するのではなく、私たちを滅ぼそうとする邪悪な人間たちと対峙するのだ。

第9章

キノは、ウィング一族が東京の漁場のどこか、廃墟となった公園に隠れていると言っていました。かつては楽しかったあの遊園地は、乗り物の故障と食べ物屋台の減少により、何年も前に閉鎖されてしまいました。

町内は長旅だったけど、きっと到着できるって確信してた。これから向かうのは妖怪じゃなくて、忍者の武器を持った人間たち。

あの忍者どもは鋼鉄の武器を持っていて、私たちよりずっと強いから、戦えるか不安だった。彼らのリーダーはどんな人なんだろう？黒薔薇悪龍、翼爪。名前を覚えておかないと忘れてしまう。

ようやく廃品置き場に到着。頭上の太陽はもう沈みかけていたから、亀の姿に変身しても安全だ。リンは注意深く見守りながら、埠頭を回らせてくれた。まず一つだけ言っておくと、他人の土地に勝手に立ち入りたくないんだ。

P.E.R.Iロボティクスに潜入して、今どこにいるか見てみよう。敵地だ。まるで、私たちのような侵入者からこの境界を守っているようだ。まるで初期の頃、C.L.Iに侵入してシャドウサイドの邪悪な計画と救世主の死を知った時と全く同じだ。

頭上の月はすでに空に沈み始め、あたりは暗くなっていた。ランプの明かりだけが、残りの私たちにどこへ向かうのかを知らせるのに十分なものだった。

「大丈夫だよ」リンはそう言うと、ゴミ捨て場の角から覗き込み、私たちのすぐ隣に戻ってきました。

「何か攻撃するものを考えないと」と、私は姉妹たちに静かに言った。「ウィング一族は何か悪さをしているかもしれない。あの粘液を使えば、何か、あるいは互いを変異させてしまうかもしれない」

「ちょっと調べてみようか」とマナコが提案した。「私、すごくこっそりしてるから」レイカはうなり声をあげ、首を横に振って、調べようとした。

「違うわよ、レイ」私は叫んで、彼女の腕をしっかりと掴んだ。翼族に見つかって捕まるのではないかと怖かった。「勝手に押し入って、みんなを殴り倒すなんてありえないわ」妹は怒りのこもった嘲り声をあげ、口がきけないから何もできないと言った。

「いい考えがあるの」と智香が言い始め、私の注意を引いた。「一緒に行こうよ」

「何か恐ろしいことが起こった場合に備えて、私たちのうちの誰かがここに残った方がいいかもしれない」とマナコは推測した。

「いや、いや」と私は断った。「君も一緒に行くんだ」マナコの巻き毛を掴み、私たちは廃品置き場へと向かった。とても静かに、見つからないようにゴミの陰に隠れた。角をこっそり曲がると、数人のウィング忍者がひそひそと話をしながら、小屋らしき場所へと入っていくのが見えた。

私は先に行動を起こし、窓の横にある樽の中に入った。姉たちとリンもすぐ後ろについてきて、二人の話を聞き始めた。面白い。何か計画があるらしい。一体何の計画だ？

「ずっと言っていたじゃないか」慈悲を乞う声が聞こえた。それはいかにも女性的で、知的で、そして内気な響きだった。ウィングは誰かを捕らえて尋問したのだろうか？そんなはずはない。時には、メインヴィランが被害者が言いたがらないようなことを要求してくることもある。「ハイブリアンは容疑者がハイブリッドに変異するまでに時間がかかる。我々はこの粘液を兵器ではなく実験に利用しようとしてきた。それはできない」

「違うわ」と、大胆な女性の声が響いた。ウィングクローに違いない。「あの粘液は特別なので、ある目的のために必要です。人類を全滅させる。そうすればウイルスが東京を襲い、私たちは豊かになり、神になれるわ」彼女は忍者たちの方を向いた。「ところで、ホメンガメに四匹も遭遇したって言ってたわね？」

きっと私たちのことを言っているのだろう。忍者の注意を引かないように窓の外を見続ける前に、私は少し息を呑んだ。汗が頭から流れ落ち、心臓は激しく鼓動していた。不法侵入しているところを見られたくない。リーダーであるにもかかわらず、リーダーは危険や怖いものに怯えることはない。マナコ、リン、レイカ、トモカは、何が起こっているのかと見守り、何が聞こえたのかを心配していた。忍者の一人が緊張した様子で話しているのが聞こえた。

「確かに見ました。よく見えませんでしたが。人間とは似ても似つかない姿ですが、とても力強いです。」

「そうだな、あの小さなウミガメたちが我々の翼に対して無謀なことをする前に、彼らを一掃しよう。」

中から大きな音が聞こえたような気がした。振り返ると、木箱が二つあって、まるで私たちが変異させた粘液のように、奇妙な青みがかった色に輝いていた。それから、何かが融合し、混ざり合い、ゴボゴボと音を立てるような、泡立ちと唸り声が聞こえた。中に何かがいるのではないかと不安になり、怖くなった。マナコは髪を掴み、一歩下がってすすり泣き始めた。トモカは彼女をしっかりと抱きしめた。

「もう木箱の中のモンスターを閉じ込めておくことはできない」とオタクっぽい声がすすり泣いた。「壊れそうだ」

「ならば解放しろ。主の御心に従う」とウィングクロウは言った。木箱が激しく揺れると、彼らは後ずさりした。割れ目から明るい青い光が差し込み、倉庫を光で包んだ。そしてついに爆発音とともに、木箱は粉々に砕け散った。私は目を覚ました。まばゆい閃光に目が釘付けになり、有害な光線で目がひどく痛くなりました。目を開けると、目の前に広がる光景に衝撃を受けました。

ハイブリッドが2体いて、それぞれ特徴の異なるヒューマノイド型の存在だ。1体はキノコのようにふっくらとした体で、キャンディスティックでできた赤い髪をしている。全身白色で胴体は茶色、冷たい氷のような腕が2本、青と赤だ。胴体の下部にある脚はすべて金色でカリカリしている。顔。顔がどんな形をしているのか見当もつかない。本当にゾッとする。青い目が2つ渦巻いていて、キャンディのような歯の横に歯茎が2つある。ピンク色のグミが顔の大部分を覆っていて、まるで傷跡を隠しているようだ。舌は長く、まるでツルツルしている生き物のようだ。そしてお腹には、もう一つの口があったのだろうか？まあ、口が開いたときは本当に怖かった。

二体目の混血種は全身が青く、ガラスのように割れそうなほど痩せている。頭髪は紫色のガラスのようで、瞳は金色のヘーゼル色、口の周りには鋭い棘がある。衣服は身につけておらず、破れてボロボロになったドレスの切れ端がそこら中に散らばっているだけだった。

私は驚きで息を呑み、口を覆った。こんなにもミュータントモンスターが生み出され、私たちを滅ぼそうとしているなんて信じられない。目をそらしたかったけれど、できなかった。

「さて」と、背後から智香がささやくのが聞こえた。「何が見える？」

その質問には答えられない。ただ目の前にいる奇妙な生き物たちを見つめていた。動物ではなく、創造され、歪められた物体たちだ。

「奇妙だな」ウィングクロウは言った。「人間とは思えないほどだが、ほとんど怪物に見える」

キャンディミュータントは口を開け、しゃがれた音を立て、粘着質な腕を主人に伸ばした。結晶に覆われたその主人は息を詰まらせ、咳き込み、骨も折れるほど体をよじり、奇妙な角度で倒れた。

「大変申し訳ございません」と科学者は謝罪した。「彼らはまだ新しく作られた体に慣れていない状態だったのです。」

「何を期待しているんだ？」ウィングクロウは尋ねた。「奴らはあまりにも愚かで、奇形だ。」

彼らが言い争っているのを聞いていた。あの新しいミュータントたちが一体何の役に立つんだ、と。私は後ずさりした。何が起こっているんだ？何かしなくちゃ。母さんにミュータントたちが街を襲撃するって伝えなくちゃ。すると…突然、足元が崩れて叫び声を上げた。宙に舞い上がり、着地すると樽が落ちてきた。ドスン

と音を立てて姉妹たちの上に落ち、大きな音がした。忍者の一人が監視されていることに気づいたのが聞こえた。

「きっと誰かが私たちの話を聞いていたわ」とトモカは言った。「私たち全員を捕まえて、搾乳できるかもしれないわ」

「さあ、行こう」と私は言った。「行かなきゃ」

立ち上がると、私たちは向きを変えて現場から逃げようとした。突然、巨大な網が私たちの真上に落ちてきて、私たちは驚きの声を上げた。私たちは皆、網の中に閉じ込められ、宙に浮いていた。網から抜け出そうとしたが、ロープが強すぎた。ウィングクローがゆっくりと私たちに近づき、他のウィングニンジャたちは彼女に見られるように後ずさりした。

「意外ね」と彼女は残酷に言った。「あなたたち女の子はみんなホネン亀なのよ」

「解放して！」トモカは青い目に毒を燃やしながら叫んだ。

「私たちがこれまで対峙したあらゆるモンスターの中で、あなたたちはこれまで以上に強力です。」

「何言ってるの？」リンは甲高い声で言った。「私たちは妖怪なんかじゃない。ハイブリッドなのよ！」

「ハイブリッド？」ウィングクロウは目を細めて繰り返した。「妖怪にしては珍しいですね。あなたはとても危険な存在です。なのに、あの忌々しい女から世界を救ったのですから。」

「シャドウサイド？」マナコは息を呑み、妹たちを殺したあの恐ろしい魔女を私が殺した時のことを思い出した。「ああ。人類を怪物に変えないように殺したんだ。」

女は私たちを睨みつけ、網の周りをぐるぐると回り、私たちを恐怖に震え上がらせた。「そして、認めざるを得ないわ。あなたたちの魂は強い。私たちはもっと強くなるため、魂を欲したの。一族のために、もっと強くなるため」

「私たちの魂を奪うなんて無理！」私は目を細めて叫んだ。まず第一に、私たちの血は大切です。そして魂も大切です。私たちを私たちたらしめている、小さく輝く青い魂です。「私たちにとってとても大切なんです。片目しかなくても、戦えます。」

「ああ」マナコは息を切らしながら同意した。「世界中を旅して、妖怪やロボット、エイリアンと戦ったこともあるし、サーカスのアリーナでも生き延びたこともある」

女はしばらく私たちを見つめていた。「さて」と女侍は、私たちが諦めるはずがないと考えたのか、あざ笑った。「せめて命は早くしてあげましょう。あなたたちの命は尽きるでしょう」

彼女は私たちの魂を引き裂こうと爪を立てた。衝撃を受け止めながら、ドアは閉じた。しかし、それは来なかった。ネットに私たちを閉じ込めていた何かが切り落とされ、私たちは地面に落ちた。

私たちはまだ網に捕まっていましたが、目を向けると、背が高くて細身の女性らしき人物がいました。ふわふわとした長い髪と8本の足、そして虫のような目をしていました。彼女は忍者と私たちの間に立っていました。

「やあ、無口なカメさん。久しぶりだな。」

奇妙な妖怪が貨物棟の屋根から飛び降りてきた時、私たちは皆、困惑して見つめた。「ちょっと困った状況になってしまったな」

「レイ、このミュータント知ってる？」マナコはレイカに尋ねた。妹は頷いた。

「私の名前はルルよ」と彼女は言った。「レイカは精神液の件で私を助けてくれたの。あなたたちが妖怪界を救ってくれた後、私は村の近くでポータルを見つけて、この人間界にテレポートしてきたの。あなたたちが困っているなら、助けてあげなきゃって思ったの」ルルはロープを切り、私たちを網から解放した。ようやく移動できるようになった。

「解放してくれてありがとう」と私は立ち上がりながら言った。「さあ、ここから出た方がいい」

「そんなわけない！」マナコは叫んだ。「あの科学者はどうなるの？ 放っておけないわ。助けが必要なのよ。」

キャンディとクリスタルのミュータントたちが突然、狂った目で唸り声を上げながら私たちを取り囲み始めた。本当に私たちを排除したかったんだと思う。

「キャンディ！サファイア！攻撃！」ウィングクローは叫んだ。

ミュータントたちは咆哮を上げながら突進してきたが、ルルはナイフでその攻撃を防いだ。「行け！私がやっつけてやる。お前はミュータジェンを持って逃げるんだ。」

レイカは首を横に振り、ルルを一人にしないことを拒んだ。

「トモ」と私はトモカの方を向いて答えた。「小屋にいる科学者を解放して。残りの連中は私たちで何とかするから」

トモカは頷き、倉庫へと急ぎ、残りの皆は新たなミュータントの敵を倒し始めた。サファイアが先に突進してきた。私は腕でサファイアの攻撃を受け止め、彼女を蹴り飛ばしてから、クリスタルミュータントの尖った棘の鋭い破片をかわした。鋭く、一突きで血が出るほどだった。リンはヒーローフォームに変身し、私を助け始めた。

「あいつらは私たちよりずっと怖いわ」とマナコは言った。私たちはミュータントたちを攻撃し始めたが、彼らが私たちより強いとは思えなかった。キャンディの腹部の腹が縦に開き、唸り声をあげる口の中に私を引き込もうとした。鋭い歯で噛みつこうとする前に、私は彼女を蹴り飛ばした。

レイカはサファイアと対峙し、地面に叩きつけられる鋭い宝石をかわし始めた。近くでは、リンとマナコが召喚された翼忍者たちと戦っていた。妹は盾を使い、リンは魔法の力で忍者たちを吹き飛ばした。

トモカは小屋までたどり着き、科学者を解放しようとナイフを抜こうとした。科学者はパニックに陥った。

"あなたは何者ですか？！"

「大丈夫よ」と彼女は言った。「私はあなたを救いに来たの。誘拐なんかじゃないのよ」

"あなたは？"

彼女はそれに応えてうなずいた。ロープを注意深く観察し、それから手から縛りを外した。自由になると、彼女は自分の手を掴んで小屋から飛び出した。

「さあ、ここから出なきゃ」と彼女は叫んだ。頷きながら、私は煙幕弾を掴み、ウィングの兵士たちの目をくらませるために地面に投げつけた。粉塵が立ち込

めると、私はチームとルルをマンホールの蓋まで導き、間一髪で下水道へと駆け込んだ。

ついに私たちは全員無事で、科学者が驚きながら私たちを見つめている間、私はゆっくり休憩しました。

「信じられないわ。言葉を話す巨大なウミガメが、知的な魔法の力を持っているなんて」と彼女は叫んだ。「信じられない。一体どうやってC.L.I.の研究所から生き延びたの？」

「長い話になりますが、ご説明いたします」と私は言った。

「ああ、私たちはジャングルから来たのよ！」マナコは思わずそう言った。

「マナコ」とリンは呟いたが、妹は変身の経緯やスライムの話ばかりしていた。ルルは特に、シャドウサイドを止めるためにレイカにC.L.I.のバイアルを渡したのは自分だと説明した。

「こうして私たちは妖怪界を救ったのです」と彼女は満面の笑みで言った。

「ごめんなさい」とリンはくすくす笑った。「長い話になってしまったんです。

「まあ、面白いな」と科学者は微笑んだ。「でも、その代償は分かっていた。ウィングクローが作り出したミュータントたちを、彼女は日本を滅ぼすために使うだろう。そして、君が出てくるまで、彼女は君を見つけられないだろう。」

「うわっ」ルルは息を呑んだ。「それは良くない兆候ね。」

「彼女をこんな目に遭わせるわけにはいかない」私は眉をひそめた。「故郷に戻って、ハイブリッドたちが人間を襲うのを阻止する方法を見つけよう」

私たちはその計画に同意し、ウィングクローを阻止する計画の準備のために家路につき始めました。

第10章

トンネルを抜けて、家に戻り、科学者にみんなの住まいを見せました。ルルは、科学者たちが私たちの新しい家を見たことがないこと、そして私たちが彼女をウィング族から救い出したので、きっと科学者を家に入れるだろうと確信していることにとても感心していました。

彼女は不思議そうに、かつてジャングルを離れた私たちが、どうして東京に現れたのかと尋ねました。私は、人間に故郷を焼かれ、東京に移住せざるを得なくなった時の話を彼女に語り始めました。彼女は言葉を失いましたが、妖怪界を救ってくれたレイカに感謝することができて嬉しかったようでした。

「もう行かなきゃ」と彼女は言った。「他にやらなきゃいけないことがあるから」

「私たちと一緒に来ないの？」マナコは困惑しながら尋ねた。

「いいえ」蜘蛛は首を振りながら答えた。「妖怪界、そして時には人間界の犯罪を監視し続けなければならなかったんです。また会いましょう。風の吹くままに行かなければなりませんから」

「まあ、お体に気をつけて」とリンは優しく頭を下げながら言った。「邪魔にならないように。人間から隠れて。妖怪だから怖がるかもしれないしね」

「心配しないで」ルルは喉を鳴らして言った。「大丈夫よ。私を探してくれれば、助けてあげるわ」

私たちが新しい友達に手を振って別れを告げると、彼女は建物から建物へと飛び移りながら夜の闇へと消えていきました。彼女が去った後、私たちは新しい人間の友達をいつもの家へと案内しました。

「さあ、着いたよ」と私は言い、家の中に入り、サンダルを脱いだ。「ここがみんなの住処なんだ。不思議だろう？ こんなところで、母ヘビがウミガメの雑種を育てているなんて」

女性の返事を待った。彼女は最初は言葉を失い、部屋を見回していた。「素晴らしいですね」と彼女は言った。「ここにお住まいなのですか？」

「ええ」リンは頷きながら答えた。「今は私たち6人だけよ。でもメッちゃんはスリープモードだから、充電が終わったら起きるわ」

「彼女はどんな見た目ですか？」

「ああ」マナコは尻尾を振りながら微笑んだ。「落ち着いて。彼女は打つ彼女は私たちがここに来る前からこの惑星に住んでいました。イカの種族であるオキマスは、彼女を逃亡者だと思い込み、武器の製造を依頼しました。しかし、彼女は私たちと一緒に逃げ出し、今では私たちの友達です。

「そして、あなたたちが全員ウミガメなら、どうやって溶け込むことができたのですか？」

「イキオイがくれたこの隠蔽装置のおかげで、人間が近くにいると人間に変身できるのよ」リンは微笑みながら、私の胸からブローチを持ち上げた。「私は妖精だから、人間には見えないのよ」

「妖精？それは本当にすごいですね。」

「それで、P.E.R.Iロボティクスについてなんですが」と智香は眼鏡を直しながら話し始めた。「何が起こっているのか説明していただけますか？」

「ああ」マナコは同意した。「ところで、あなたは誰なの？」

「では、自己紹介をさせてください」と科学者は切り出した。「ペリウィンクル・ヤマグチと申します。この研究所は、1990年代後半に会社が設立されて以来、数十年にわたりロボットと奇妙な化学物質の開発で知られています。ロボットが人々の役に立つことで、より良い世代を築くことで知られています。そして、私たちの科学者たちは、つい先ほど発見したハイブリアンのような、数々の奇妙な発見をしてきました。あの冷酷な女が全てを台無しにしようとするまでは。」

「シャドウサイド」私はぶつぶつ言った。

「ああ。皆が作った粘液は化学的に有毒だった。C.L.Iが世界征服のために作ったものだった。ハイブリアンを作り、それを人間に注入するのは非常に危険だと、私たち全員が知っていた。生物のDNAを改変し、凶暴な怪物に変えてしまう可能性がある。もしそれが放出されたら、世界中に感染するのではないかと私は恐れていた。残った粘液は皆で安全に保管しなければならなかった。秘密にして、盗もうとする者から守らなければならなかった。C.L.Iがあの粘液を作ったのは、シャドウサイドがミュータントの軍隊を作り、地球を征服するためだと私たちは知っていた。でも、彼女は姿を消したと思っていた。どうやって？」

「私たちは彼女を殺した」リンは言った。彼女の声は柔らかく穏やかだったが、理解できるほど力強かった。「全人類に感染させないために、彼女を止めなければならなかった」

「ああ。それは衝撃的だ。だが、彼女はまだ諦めていなかった。お前たち、ウミガメを四匹捕まえたと呟き続け、悪事のために血を吸い取ろうとしたのだ。」

「どうやって？」トモカは尋ねた。「なぜ彼女は私たちを捕まえたの？」

「それは、君たちを実験台にするつもりだったからだ。奴らは君たちの血を抜き取り、死に至るまで吸い尽くし、洗脳された兵士に仕立て上げようとしていた。我々が研究していた残りの粘液は、あの忌まわしいウィング一族に奪われた。

ウィングクローも含めて、奴らは実に冷酷だ。君たちの存在を知ってからというもの、彼女は君たちを滅ぼすことに執着している。」

「まあ、山口さん、ここで休んだ方がいいわよ。ゆっくり休んで」と母は言った。「まなこ、彼女に休む場所を教えてあげて」

マナコは微笑みながらペリウィンクルの手を握り、毛布を用意するリビングへと案内し始めた。彼女がいない間、私はウィングクローのことを考え続けていた。彼女は私たちの存在を知り、私たちの力を発見したのだ。彼女がシャドウサイドとして熟練していることは知っているが、どうすれば彼女を止められるのか、本当にわからない。

「シラハラ、どうしたの？」と母が尋ねた。私は母に視線を向けた。何と言えばいいのか分からなかったが、シャドウサイドのことが頭をよぎった。彼女は本当に恐ろしい。妹の血を搾り取ろうとし、殺そうとした。世界を救うためだけに、妹たちを救うために命を危険にさらすなんて、耐えられなかった。

「私たちは本当に特別な存在だと思っていたのに」と私は優しく言った。「私たちを創ったのと同じ粘液が、今もなおそこに存在し、他の犠牲者全員をミュータント化させている。私はC.L.I.のせいで姉妹を失った。二度と失うわけにはいかない」

「白原、自分の過ちに惑わされないで」と彼女は私を慰めてくれた。「あなたは自分自身と姉妹たちについて、自分が知っていることを学んだ。あなたはあらゆる意味で特別な存在で、悪と戦っている。ウィングクローを止めることができれば、日本を救うこともできる」

私はそれについて考え始めました。たぶんお母さんもそうだね。外には他のウーズがいるから、私たちが特別だったわけではないことは分かっている。この二人のミュータントはそれぞれ違う力を持っているかもしれないけど、私たち残りの人間は、その力こそが私たちを特別なものにしている。

数日が経ち、ペリは私たちの家での生活や、私たちが解き明かした妖怪の姿にも慣れてきた。科学者は自分自身のこと、そして長年研究してきたハイブリアの秘密について語り始めた。錬金術と化学を発見した当時の彼女の家は、非常に高貴な家柄だった。彼女は、粘液はあらゆる動物界と、そして彼らの人間の祖先とも関連があると言った。

「それでは私たちの血は人間と関係があるのですか？」と私は尋ねました。

「長い話だったわね」とペリは眼鏡を直しながら言った。「動物はたくさんの種類に分かれていて、それぞれの動物には独自の生命体があるの。動物がいなければ、世界は植物で覆われ、人口過多になってしまうわ。ありがたいことに、動物たちはみんな特別な存在なの。仲間になってくれるし、中には食べ物になるものもいるのよ」

「動物の食べ物を食べるのは嫌だ」とマナコさんは泣き言を言った。

「悲観しないで、マナコ。私たち人間や動物たちが生きていくために必要な食物連鎖の一部なのよ。それが私たちの命なのよ。」

彼女はまた、ハイブリッド生物を変異させるために動物のDNAが血液に注入されたと説明しました。私たちの血液は動物界と関連しているので、私たちが人型のウミガメであるというのはとても奇妙でした。

キャンディとサファイアはどこにいるんだろうと待ち始めたが、港での襲撃以来、二人の姿は見当たらず、消息も分からなかった。キーノはよく私たちのところにやって来て、サファイアのクリスタルやキャンディの砕けたキャンディなど、何か証拠を見せてくれた。彼女がキャンディを落とすかどうかは分からない。

昨夜、街中で大暴れしたというニュースがあちこちで流れ始め、青い水晶と砂糖の爪が壁を引っ掻いたせいで、店や建物が損壊したという。新しいキャスターが町で起こっている奇妙な出来事を報道しているが、こんな大惨事を引き起こした犯人は誰なのか、誰も分からない。キャンディとサファイアが私たちを連れてこようと、町を破壊して一緒に戦わせようとしている証拠に違いない、という話も聞こえてくる。

残りの私たちは、恐怖と破壊の暗い世界に陥ったら、街に何が起こるのかと心配し始めています。

「どうするの？」相変わらず心配そうにマナコが尋ねた。「キャンディとサファイアが町中のものを壊してる。このままじゃ、このままじゃダメよ。」

「手遅れになる前に、この2人のミュータントを止める方法を見つけたほうがいいだろう」と私は言った。

「方法を見つけるの？」トモカが尋ねた。「キャンディとサファイアはミュータントで、危うく私たちを殺しそうになったのよ」レイカはうなり声をあげ、うなずいた。「ウィングクローが私たちに何をしたか覚えてる？」と真ん中の姉は続けた。「彼女は私たちを巨大な網で捕まえようとしたのよ！」

ドアが開く音が聞こえた。キーノが靴を脱いでダッフルバッグを持って家に入ってきた。彼は何か言おうとしているのが分かっているようで、取り乱した様子だった。「みんな、悪い知らせがあるんだ」

「どんな悪い知らせ？」リンは神殿から覗きながら尋ねた。

ウィング一族は、君たちが彼らに出会ってから2週間、君たちを追っていた。キャンディとサファイアは東京で大混乱を引き起こし、君たちを隠れ家から連れ出そうとしていた。ウィングクローは、もし君たちが彼らと戦わなければ、キャンディとサファイアが君たちを追ってくると言っていた。

皆、その言葉について考えました。ミュータントを止める方法があればいいのに、でも、あまりにも強すぎました。

「どうやって止めるの？」トモカは尋ねた。「とにかく強すぎるのよ。」

「まあ、方法はあるわね」とペリが言った。彼女が席から立ち上がると、私たちは彼女の方を向いた。「キャンディとサファイアが飲めるような小さな錠剤か何かを作ってあげれば、彼女たちは普通の物体に戻るわ。ハイブリッドを、まるで生ける前の姿に戻すみたいね」

「あのね」私は彼女の計画について考えながら、少しの間考え始めた。もし彼らが普通の物体に戻れば、ウィング一族を止められるかもしれないと、少しの間考えていた。それを聞いて、私の心は興奮で高鳴り始めた。「それはいい考えかもしれない。だが、ウィングクローを止めるには、彼らと戦わなければならない」

「白原さんの言う通りだ」母は言った「早く行動を起こさなければ、敵に優位に立たされてしまう。君たちはくノ一であり、魔法戦士であり、名誉のために戦うのだ。厳しいことを言ってしまったことをお詫びする。ただ、君たちを失うのが怖かっただけだ。」

「私もです」と私は言った。「妹には、前回と同じ運命を辿ってほしくないんです。

「もちろんだ」とキノは言った。「ウィングクローが君に戦いを強いているんだ。

「危うく死にかけたけど、シラ、よかったわ」とトモカは切り出した。「あなたの愛情が私たちを救ってくれたの。彼女を止められるなら、もう一度やり直せるはず。今度はウィング一族と一緒にね」

私は微笑んだ。もしかしたら、彼らの言う通りかもしれない。まだウィングクローを止められる。

「わかった、だがまずはハイブリッドに対処する必要がある」と私は決心した。

それで、ペリとトモカは自家製の化学セットで、キャンディとサファイアを普通の物に変える治療法を研究し始めた。まるで逆突然変異みたいなものさ。ペリはマナコに、たい焼きっていうものを焼いてくれるように言った。中にペストリーが入った、スイマーみたいなケーキだ。それが何なのか全然分からなかったけど、食べるのが待ちきれなかった…ウィングクローを止めた直後に。

「本当にうまくいくの？」マナコは尋ねた。

「そうに違いない」とペリは言った。「私は、強くて凶暴な混血種を作るのではなく、彼らを元通りに戻す粘液を作ろうとしていた。もしそれがうまくいけば、東京を滅ぼすこともないだろう。」

「あれはハイブリアンだった」と私は言った。

「そうだね。スプレーボトルで吹きかけるのではなく、無理やり食べさせる必要がある。私はあなたの助けを願っています作る守る錠剤は焼いたペーストの中に入れられ、それが正しければ彼らはこれを食べられるでしょう。」

「これ、解毒剤入りで食べるの？」とリンが尋ねた。科学者はうなずき、髪を横に流した。「簡単そうね」と妖精は甲高い声で言った。「そうすればウィングクローを止めて日本を救えるわ」

「たい焼きができました！」とマナコはついに宣言し、たい焼きを取り出した。餡の中に防腐剤が挟まれ、完璧に焼き上がっていた。あまりにも美味しそうで、どうしても食べたくなったが、防腐剤が混ざっていたので、食べられなかった。

「ああ、すごい」唇を舐めながら言った。「すごく美味しい」麗華も頷いて同意した。鼻の下から漂ってくる強烈な香りに、どうしても食べたくなったのだ。

「キャンディとサファイアのためのものよ」とトモカは叱りつけた。「あの混血種が私たちを狙っているかもしれないから、ウィング一族と戦わなきゃ。きっとあのお菓子は食べられるはず。食べざるを得なかったのよ」

私は少し間を置いて、たい焼きに目をやった。もしかしたら彼女の言う通りかもしれない。これを食べたら、もう普通のウミガメには戻れない。ため息をつきながら、皆に告げ始めた。ウィングクローとその混血種たちと対峙する時が来たと。容易なことではないだろうが、混血種とウィング一族から日本を救う必要があるのは分かっていた。

第11章

時が来れば、月は既に暗くなる。ハイブリッドから日本を、そして翼族の世界征服を阻止できるのは、今しかないと分かっていた。心臓は激しく鼓動し、不安は今も表情を歪めている。母はかつて私に、冷静さを保ち、真の目的に集中しなさいと教えてくれた。

シャドウサイドを最後に止めた時、私はまさにそれをやった。彼女の怒りと支配に、私はいつも弱すぎて、人類と生命を全て滅ぼすことができなかった。リンは恐怖に屈しないよう励ましてくれたが、同時に勇気も必要だとも教えてくれた。妖怪界の住人たちのおかげで全ての力を与えられ、パワーアップしてシャドウサイドを倒し、C.L.I.を滅ぼした時だ。C.L.I.を倒したように、ウィング・クランをも止められるなら、きっと彼らも止められるはずだ。

私たちは港の近くの古い倉庫に集合させられました。そこは薄暗く、窓は割れ、古くて錆びた木箱が置いてあり、とても憂鬱でした。何もかもが暗くて寒かったです。

「本当にこれでうまくいくんですか？」と私は尋ねました。

「間違いないわ」とマナコさんは箱を手に持ちながら言った。「たい焼きにはパイ生地が入っていたから、焼くとすごく美味しかったのよ」

落ち着きを取り戻し、緊張を鎮めようとした。久しぶりの出来事だった。忍者の集団とそのリーダーと戦うなんて。武器を取り、ヒーローの姿に変身して戦った。辺りは真っ暗だったが、息を整えて倉庫の周囲を見回し、侵入者がいないか探した。辺りは完全に暗く静まり返り、聞こえるのは窓の低い軋み音と風の音だけ。もしかしたら、まだここには来ていないのかもしれない。今はまだ。

突然、背筋が凍るような感覚に襲われ、誰かが隠れているのがわかった。突然、翼忍者の集団が武器を構え、爪を振りかざして円状に私たちを取り囲んだ。見覚えのある人物がゆっくりとその集団の中に歩み寄り、その目は赤く輝いていた。

「ウィングクロー！」私は驚いて息を呑んだ。剣は両手にぎゅっと握りしめられ、怒りで目が細くなった。彼女を捕まえようとした侍に見覚えがあった。

「間に合ったな」ウィングクロウは冷たく笑った。「俺の忍者を倒すなんて、お前らって本当に強いな。もうどうでもいい。お前の終わりは早く、そして明白なものになるだろう。サファイア！キャンディ！」

影から現れたサファイアとキャンディが、私たちの肉に噛みつこうと近づいた。私たちは後ずさりし、追い詰められ、背後からしっかりと捕らえられた。何かしなくてはならない。そして今、それが現実になった。

「待って！」マナコは忍者とハイブリッドたちを止めながら叫んだ。「俺たちを殺す前に、まずはこのたい焼きを食べなさい。体力維持になるし、この小さなケーキは水泳選手の形をしているのよ。」本当に本気なの？マナコは私を見て、肘を軽く突いた。

私は戸惑い、瞬きをして、素早く頷いた。「ええ、ええ、そうよ」。一体なぜ妹がこんなことを口説きおとしたのか分からなかったけれど、前向きに考えようと努めた。顔をしかめて、真奈子に寄りかかった。「どうしてこんなことをさせるの？」

「ただ私を信じてください。」

キャンディとサファイアはじっと私たちを見つめ、それからゆっくりと近づいてきた。たい焼きの匂いが強烈で、二人は唸り声をあげてうろたえている。マナコは箱に手を伸ばして蓋を開けた。

「どうぞ」と彼女は微笑みながら続けた。ハイブリッドたちは手を伸ばして食べ始めた。本当に行儀が悪い。犬みたいにずさんに食べている。

「うまくいかないわ」リンは何かがうまくいかないのではないかと恐れながらささやいた。

「きっとそうなるわ」マナコは静かにささやき返した。

たい焼きに手を伸ばして、ずぼずぼと食べ始めた。日本のマナーの悪さはすごい。ちゃんと食べてくれて本当に良かった。それに、二人とも本当に生き 物みたいに振る舞ってる。すぐに元に戻って、また普通の物体に戻るんだろうな。

キャンディは歯の間に何かカリカリとした感触を感じた。目を見開き、咳き込んだ。サファイアは困惑して彼女を見た。驚いたことに、キャンディミュータントが何かを味見して歯を折ってしまったことがわかった。彼女はペストリーの中に入っていた小さな塊を吐き出し、それを見た。しばらく沈黙が続いた。二人のミュータントは、かなり怒った様子で私たちに向かって唸り声を上げげた。

「彼らはそれを理解したと思います」私は恐怖を感じながら叫んだ。

「うまくいかないって言ったでしょ！」リンは叫んだ。

「捕まえろ！」ウィングクローが叫んだ。ウィングの忍者全員が攻撃を開始し、まっすぐに突進してきた。

私は素早く氷の盾で身を守り、一蹴りで彼らを倒した。レイカは炎を取り出し、忍者たちに投げつけ、彼らを倒して炎上させた。マナコは素早く空中に舞い上がり、トゲの玉を忍者たちに放ち、ツタウルシの毒を忍者たちに与え、彼らは痒み始めた。リンは魔法の輝くエネルギーを持ち上げ、サファイアがクリスタルを放つとバリアで身を守ったトモカと一緒に忍者たちに撃ち込んだ。トモカが苦痛に呻くと、レイカが駆け寄り、翼忍者たちに炎を放ち、彼らを焼き尽くした。

私はウィングクローに立ち向かい、彼女の爪に剣を振り下ろしたが、倒れてしまった。立ち上がると、サムライ戦士から横にステップして離れ、木箱に飛び乗った。

「思ったより頑固ね」と彼女は唸った。「でも、私があなたから魂を奪ってしまえば、きっと魂は見つかるわよ」

私は勇気を出して屋根の上の鎖に飛び乗り、忍者戦士の集団に向かって体を振り下ろし、水しぶきを上げて彼らを倒した。

「早く！こっちへ！」リンが叫び、私たちを外へ連れ出した。私たちはチャンスを逃さず、猛スピードで倉庫から飛び出した。

「あの少女たちを逃がすな！」ウィングクローは叫んだ。

息を吸うたびに心臓がドキドキと高鳴り、全速力で走った。通りの廊下を曲がり、街を縫うように進んだ。一般人に見つかる前に、人間の姿に変身しなければならなかった。魔法のドレスを着ていて本当に良かった。さもないと、みんなに仮装していると思われるだろう。

キャンディとサファイアはすぐ後ろにいるのに、一歩踏み出すたびに咳き込み始めた。普通の咳ではなく、まるで悪魔の窒息みたいだ。もしかしたら、食べたたい焼きの薬のせいで咳が出始めたのかもしれない。それがこんな具合に具合が悪くなる原因だったのだろうか？いや、そんなはずはない。

「ここよ！」リンが叫んだ。人魚の看板がかかっているような建物に着いた。「タマミのパーティーボート」と書いてあった。とても可愛くて愛らしい船だったが、ここしか入る方法がないのかもしれない。

私たちは急いで部屋に駆け込んだ。廊下を歩くたびに、足がきしむ。壁を見渡すと、カラフルでパステルカラーの可愛い貝殻でデザインされていることに気づいた。彼が部屋に入ってくると、建物の中にいるのがわかった。ここは海をテーマにしたレストランのようで、貝殻で遊ぶ乗り物やステージ、そしてシェフが実際に料理をする様子を見られる場所がいくつかあった。また、建物のタコがガラスの中に隠れて普段暮らしている水族館もあった。ゼリーのような生き物の格好をしたマスコットたちはとても可愛くて面白く、私はこの場所が好きになり始めたようだ。サファイアとキャンディが入ってくると、私たちはこっそりと彼らから離れた。彼らは皆、うなり声をあげていた。彼らは私たちを尾行してここまで来て、復讐するつもりだ。私たちは身構え、魔法の力を使って2人のハイブリッドに反撃する準備を整えた。

驚いたことに、彼らはピクピクと痙攣し、うめき声を上げ、さらに最悪なことに、紫がかった青い液体を吐き出し、私たちが入ったキッチンの周りに広がり始めました。私は本当に気持ち悪くて、こんなのマナー違反だなんて考えられませんでした。スライムはあらゆるところに滲み出し、低いシューという音を立てながら、あちこちに広がりました。

「なんか変だわ」とマナコは顔面蒼白になって言った。意識を取り戻したキャンディとサファイアが突進してきたので、私たちはそれぞれ別の方法で避けた。私とレイカは左、トモカとマナコは右に。二人は地面に倒れ込み、モンスターの姿を見た人々は恐怖で悲鳴を上げた。二人はレストランから逃げ出し、その場か

ら避難した。キャンディは立ち上がり、青い粘液を吐きながら私たちに向かって威嚇してきた。「今は逃げないわ」私は剣を構え、ハイブリッドたちに向かって突進した。

トモカは振り返ると、ドクター・ペリらしき人物が群衆の中へと進んできたのが見えた。幸いにも間一髪で到着できた。「ドクター・ペリ！」サファイアとの喧嘩から立ち直り、トモカは科学者のもとへ駆け寄った。科学者もトモカに駆け寄り、ついに二人は出会った。

「智香、よかった、無事だったわ」彼女は安堵のため息をついた。「治療薬は渡したの？」

「ええ、でもみんな気づいてたのよ」と智香は頷きながら言った。「で、急に吐き始めたの。床中に広がって、ぐちゃぐちゃになってるの」

「あらまあ！」彼女は息を呑んだ。「抗ハイブリアン薬は彼らには効かないの。吐き気が反応に伝染して、止められるかもしれないのに。」

「正常に戻す方法はあるのでしょうか？」と彼女は尋ねた。

「時間はかかるかもしれないけど、キャンディとサファイアに十分なダメージを与えれば、胃袋から残骸がこぼれ落ちると思う」と彼女は言った。トモカはキャンディの前で頷き、口の中を粘液で完全に覆い尽くしながら突進したが、キャンディは彼女を蹴り飛ばして手の届かないところへ追い払った。

マナコはテーブルに飛び乗って生命の胞子をサファイアに放ったが、サファイアはそれを防いでマナコを蹴り飛ばした。私は貝殻の乗り物の一つを忍者数人から隠すのに精一杯だった。ガラスのコップから水の泡を浮かせて、忍者を手の届かないところまで洗い流した。突然、トモカが駆け寄ってきて、何かを囁いた。

「智香さん、本当にそれでいいんですか？」と私は尋ねた。

「私を信じて！」と彼女は叫び、サファイアとキャンディと戦うのを手伝うために、自分の物理能力を駆使して駆け寄ってきた。

「こっちよ、キャンディ！」マナコは手を振りながらからかった。彼女は宙に飛び上がり、魚のランタンにぶら下がっているラズベリーを吹き飛ばした。キャンディは唸り声をあげ、キャンディコーンのような歯を妹に吐き出したが、妹は飛び退き、ランタンからランタンへと飛び移った。トモカはサファイアのクリスタルから身を守り、防御シールドを粉々に砕いた。地面に倒れ込むと、リンが助けに入り、クリスタルミュータントに魔法を放った。

考えがまとまる前に、ウィング忍者に囲まれてしまった。テーブルに飛び乗ってくるりと回転し、足で忍者を蹴り飛ばした。するとキャンディのモンスターの腹の舌に腕を掴まれ、食べられそうになった。モンスターの口から腕を引き離すと、キャンディは顔を下にして転げ落ちた。

「さあ、レイカ！」レイカに叫んだ。レイカは咆哮を上げながら、サファイアとキャンディの腹を殴りつけた。二人のミュータントはよろめき始め、再び嘔吐し始めた。突然、二人の体がゆっくりと溶け始めた。サファイアのクリスタルは剥がれ落ち、髪はボロボロと崩れ落ち、キャンディの歯は砕け、アイスクリームのような腕は溶け始め、脚はクッキーの粉々に砕け始めた。

「みんな！うまくいった！二人とも元の物体に戻った！」と私は歓声を上げた。それから数秒後、二人のミュータントは粉々になったガラスと茶色いドロドロの塊に消え去った。

「まだ終わりじゃない」とリンは言った。「まだ倒すべき悪党が一人いるんだ」

そうだ。ウィングクロー。彼女こそが、私たちにとって手強い唯一のリーダーだ。彼女は私たちよりずっと強く、力強い。「さあ、行こう、みんな」と私は皆に言った。それから女の子たちを外へ連れ出し、レストランを最後にもう一度見渡した。店内は完全に空っぽで、割れた皿、落ちたランタン、そして溶けて消えた

キャンディとサファイアの残骸だけが残っていた。私は振り返り、姉妹たちを追いかけた。

第12章

建物を出て、私たちは急いで湾の埠頭へ向かった。キャンディとサファイアをようやく止めることができたが、ウィングクローはまだ変異原を持っていた。決して楽な道ではなかったが、今回は姉妹たちが一緒にいてくれた。

「彼らは私たちを殺すのを諦めないだろう」私は息を切らして言った。

「何か考えなきゃ」とトモカが付け加えた。そして確かに、その通りになった。私たちは第二埠頭にある、かつて人間が歩行用の靴を作った古い靴工場へと向かった。見渡すと、マナコが箱の横に置かれたローラースケートを見つけた。彼女はあるアイデアを思いつき、これはすごくクレイジーなことになるぞ、と私たちに言った。

レイカに蒸気が噴き出すパイプをいくつか壊すように言った。レイカはそうして、パイプを勢いよく開けた。忍者たちが部屋に入ってきて、私たちは皆、安全のために影に隠れた。彼らはこっそりと辺りをうろつき、私たちを探していた。何か攻撃できるもの、何でもいいから。トモカが振り返ると、カラフルなボールの形をしたキラキラ爆弾の箱があった。これはうってつけの気をそらすのにいいかもしれない。彼女は一つを掴み、ウィング忍者たちに投げつけた。彼らはキラキラ光る小さな破片にまみれ、咳き込み、飛び散った。

次にマナコが登場した。ローラースケートを履いたまま滑走を開始し、回転腕攻撃で警備員たちを倒した。リンは小柄ながらも彼らの足元を飛び越え、足元に回り込んで蹴りを入れた。レイカは木箱で身を守っていたが、警備員たちは電気手袋で感電させようとした。箱は粉々に砕け、彼女は警備員の顔面を蹴りつけた。

私は頭上を飛び越えて忍者たちを避けながら進み、忍者たちが互いに感電し合うように仕向けて、彼らを気絶させました。

「通るぞ、忍者！」マナコが声を上げげた。彼女はスケートで忍者らを倒し、手で蹴り飛ばしながら近づいた。ツタを使って天井まで飛び上がり、忍者の頭を叩きつけた。

一方、智香は二人の警備員に拘束されていた。彼女は念動力で二つの水鉄砲を浮かせ、警備員の顔に水を噴射した。水滴は彼らの手袋に落ち、感電し始めた。自由になった智香は駆け寄り、さらに数人の警備員を蹴り倒した。

最初は全員倒したのですが、まだ倒すべき敵が一人いました。日本の狐面を被った奴です。

「あなたたち、すっかり死んでるわね」と彼女は冷笑した。「でも、シャオには敵わないわよ」

「シャオ、ね？」と冗談を言った。「一体何の名前なの？それに、キツネの仮面で顔を隠してるの？」

「冗談を言う時間はないわ」とリンはニャーと鳴いた。

大隊長が突進してきて、私たちは彼女の電撃の手を避けざるを得ませんでした。リンは巻き込まれて地面に倒れ、怪我を負い、麻痺しました。立ち上がることさえできたものの、手足の神経は麻痺していました。

「大丈夫か、リン？」マナコは私たちの守護妖精を抱き上げながら呼びかけました。

「大丈夫…」と呻いた。レイカは唸り声をあげ、炎を召喚して周囲に広げ、炎のグローブへと変化させた。シャオに突進し、燃え盛る怒りの拳で殴り倒した。姉の力には敵わず、危うく避けそうになったが、かろうじて頭をかすめた。

「さあ、みんな！」マナコとトモカに叫んだ。シャオに突進し、パンチを放つと、シャオは壁に向かって吹き飛んだ。そのまま地面に崩れ落ちた。息を切らしながら辺りを見回した。ウィング忍者は全員ノックアウトされ、私たちは全員立ち上がっていた。私は安堵のため息をついた。これほど気分が良いのは初めてだった。

「リン」私は叫んだ。「ウィング一族を止めた！」

「ええ」リンはため息をつき、足を引きずりながら立ち上がった。「でも、まだ倒さなきゃいけないウィングクロー彼女はここからそれほど遠くないところにいます。」

私と姉たちは先頭に立って工場の外へ向かい、まだ敗北したままの兵士たちを地面に残しました。

倉庫の角を曲がり、長い埠頭と湾へと向かった。残されたのはウィングクローだけだ。最後の戦いが刻一刻と近づくにつれ、心臓はドキドキと高鳴った。街の灯りは遠くなり、ハイブリアンを手にした邪悪な侍を見つけることができた。これこそが、ウィング・クランを永遠に止める唯一の方法だ。

「ウィングクロー、お前の混血種と忍者どもは倒したぞ」私はナイフを取り出して命じた。「今度はお前を倒してハイブリアンを取り戻す」

「ふふ」ウィングクロウはニヤリと笑い、唇から嘲笑が漏れた。彼女は私たちの方を向き、鋼のような瞳がヘルメット越しに光った。「君たち、思ったより強いな。だが、粘液がある限り、まだ終わりじゃない」

「それでどうするの？」友香は弓矢を掲げながら尋ねた。

「海に捨てるのよ」と彼女は答えた。海の生き物たちがそれを食べる。もしかしたら、海中に広がって、それを食べた陸生動物たちが変異して、私の新しい番人になるかもしれないわ」

「新しい忍者集団を作りたいの？」とマナコは尋ねた。「シャドウサイドみたいにミュータント軍団を作るってことでしょ！」

「渡せ、ウィングクロー」リンは囁いた。「落としたら、みんなハイブリッドに変身しちゃうよ」

「そして、それをする前に、私たちを乗り越えなければならないでしょう」と私は言い終えた。

侍は、きっと許さないと悟り、冷笑した。私は深呼吸をして、五人でウィングクローへの攻撃を開始した。

リンは宙を舞い、翼の侍に向かってピンク色のきらめく光線を放った。それを弾き返し、レイカを蹴り倒した。リンは苦痛に呻き声を上げ、侍に向かって火の玉を放った。

ウィングクローは唸り声を上げてトモカに突進した。姉の真ん中は魔法の結界で側面を守り、爪の鋭い光は砕けそうになった。歯を食いしばって結界を保とうとしたが、砕け散った。姉の真ん中は唸り声を上げて地面に倒れ込み、滑るように地面に倒れた。

マナコは棘の球体に姿を変え、ウィングクローに向かって転がろうとしたが、ウィングクローはそれを打ち倒し、跳ね返って桟橋に落ち、穴が開いた。私は刀でサムライを斬ろうとしたが、彼女はそれをかわして私の腹を蹴った。私は吹き飛ばされ、桟橋に落ちた。翼は曲がり、甲羅の一部が割れたかもしれない。

「お前らって本当に愚かだな」ウィングクロウは我々に向かって唸り声を上げた。「俺とウィング一族を止められると思ってるのか。お前ら全員、本当に情けないな」

「みんな、彼女の言うことなんて聞かないで！」リンは、傷ついた私たちを見て叫んだ。「君たちは自分の起源を知り、あの粘液の起源も理解したんだね。強い子たちよ！君たちなら何でもできる！」

希望を取り戻した麗華は立ち上がり、痣だらけのマナコを助け起こした。私たちを傷つけたウィングクローに復讐するためだ。リンは翼を広げて空高く舞い上がり、急降下しようとしたが、ウィングクローはそれをかわし、私たちの守護妖精は転げ落ちた。リンは笑い声を上げたが、トモカの物理魔法で撃ち抜かれた。マナコは蔓を持ち上げ、侍の爪を掴み、突き刺した。妹は切りつけられた。私たちは力なく駆け寄り、彼女を助け起こした。

「私たちは何をすればいいの？」と彼女は尋ねた。

「足元にこんな不安定な桟橋があるのに、このままでは進めないわ！」私は弱々しく言った。不安定な私たちの重みで、桟橋は今にも壊れそうだと思った。木が長く軋み、木片が割れ始めた。私は気を取り直し、ウィングクローが襲いかかろうとしているのを見た。必死の思いで、水の力で素早く攻撃を防いだ後、彼女の爪から横に避けた。爪は衝撃で砕け散り、金属が割れた。他の姉妹たちもゆっくりと後を追った。木が割れ始めると、彼女たちはウィングクローに襲いかかろうと逃げ出した。

「お願い、泥をください！」と私は要求した。「足元の木が割れちゃいそう」

「このままだと水に落ちてしまうよ」と智香は叫んだ。

「もしお前たち全員を倒せないなら、全員連れて行くぞ！」戦士は爪を振り上げ、ドックに激突して損傷を与えた。

「だめ！」私たちは急いで避けた。木は割れて水に落ち、柱に結ばれていたロープが一本引っかかっていた。ウィングクローの足を伸ばして、私たちが脱出した端に手を伸ばそうとした瞬間、彼女は私の足を引っかけた。私は桟橋の縁につかまり、何とか抜け出そうと奮闘した。ウィングクローを 把握する。

「待って、シラ！」マナコが叫んだ。姉たちが駆け寄ってきて、私の手を掴んで引っ張った。彼女たちは全力で私を引き上げようと奮闘する。背後にいたウィングクローも手を伸ばして私たちを水中に引きずり込もうとした。ハイブリアンが水中に落ちそうになると、リンは素早く横を通り過ぎ、素早くバイアルを水中から引き抜こうとした。ウィングクローのベルトを締めた。彼女は苦労して、小瓶を引っ張り、緩めるまで引っ張った。悲鳴を上げて小瓶を腕に抱え上げ、不器用に飛びながら、ハイブリアンを掴もうとするウィング・サムライの手をかわした。彼女は間一髪で飛び去り、それから妹たちを助けた。

もう一度引っ張ると、私たちは後ろに投げ出され、私はウィングクローに掴みかかった。彼女は水の中へ引きずり込まれ、大きな水しぶきが上がった。私たちは目を覆い、立ち上がった。ようやく無事だった。すっかり疲れ果てていた。立ち上がって、ウィングクローが落ちた場所を見下ろした。彼女の痕跡はどこにもなく、水面には泡だけが弾けていた。

「ずいぶん先が遠いな…」マナコはつぶやいた。

「彼女はもういないの？」智香は尋ねた。

「ええ、そうです」とリンは言った。彼女はドックの破壊の際にウィングクローが落とした小瓶のところまで歩いてきた。小瓶はまだ無傷で、あの馴染みのある輝きを放っていた。リンは私たちの方に顔を上げて、顔に笑みを浮かべた。私は彼女の返事を待つと、彼女は答えた。「やったわ、みんな。ウィングクローを止めたのよ」

残った全員が長いため息をついた。東京を救い、翼族を阻止し、ついにチームとして力を合わせたのだ。「ほっとした！これで日本にはハイブリッドが跋扈することはなくなる。それに、翼族もついに倒されたしな」

「ハイブリアンは無事です」とトモカは小瓶を手にしながら答えた。「ペリに返して厳重に保管します」レイカはうなり声をあげ、頷いた。

携帯が鳴るのが聞こえた。取り出して耳に当てた。「みんな。ペリだよ。聞こえる？大丈夫？」

「ペリだ！」私は友達にささやいた。「そうよ、やったわ。ウィング・クランを止めて、ハイブリアンを取り戻した。東京は救われたわ。」

「ほっとしました！」科学者は安堵のため息をついた。私たちの素晴らしい仕事ぶりを心から喜んでくれているのが伝わってきた。「あなたたちは本当に特別な存在です。日本はあなたたちの勇気と決意を称えました。」

日本が私たちを光栄に思ってくれたことに、言葉を失いました。もしかしたら、私たちはヒーローになる運命なのかもしれません。人々に受け入れられ、邪悪な混血種や悪党から街を救い、新しい環境に適応する手助けをする運命なのかもしれません。私は兄妹の方を向きました。彼らもリンと同じように微笑んでいました。

「きっとお母さんはあなたたちをとても誇りに思うでしょうね」と彼女は羽を羽ばたかせながら言いました。

「ああ」と私は言った。「そうするだろう。家に帰ろう」ゆっくりと私たちは桟橋を離れ、本土へ、そして皆が休める家へと歩き始めた。

「もう、もうだめだ」とマナコは疲れ果ててため息をついた。「お風呂に入ればリラックスできるのに。」

妖怪には様々な形や大きさがあり、幸運をもたらすものもあれば、悪さをするものもあります。私たちはハーフハート・マジカルくのいちハイブリッド・ウミガメ。街を危険から守るのが私たちの使命です。

私は陸と海の両方のカメへの愛と日本文化への愛を呼び起こし、世界を感動的な物語に形作りました。